

目次

3頁	スマホ片手に
9頁	梟と鵜
21頁	シロイハナ
35頁	きもだめし
55頁	声なき歌姫と砂漠の剣
102頁	奥付
	ジョーズ
	松葉円
	涼葉千里
	ロータス
	タナカ

ジョーズ

スマホ片手に

「何してるの？」

そう尋ねられて、僕の心は一瞬にして歓喜に湧く。まさか彼女から話しかけてくれるなんて！

イヤホンをはずし、勢い口を開こうとして、返答に困った。

質問の意図は明らかだった。どうしても聞かなくてはならないことではないだろうけど、質問するに値する行動を取っているのだらうと、実際に質問されて思った。まさかここで、帰るための電車を待っているだとか聞かずとも明白な答えは期待していないだろうし。

言葉に詰まったのは、この行為を満足に伝えられるかどうか自信がなかったからだ。一言で済ますのでは納得してもらえないだろうし、かといって冗長な説明では飽きられてしまう。

「スマホゲームしながら、音楽を聞いて英単語覚えてる」

なるべく素っ気なくならないよう注意しつつ、一息に言った。

「見れば分かるよ。一つに集中したら？」

その言葉を待っていた。これで会話が続けられる。僕はオートプレイ中のゲームをズボンのポケットに、単語帳を学生鞄にしまいながら答えた。

「時短だよ、時短」

「時短？ 時間短縮ってこと？」

「そうそう」

何分、今の高校生活には時間がいくらあっても足りない。

授業の予習復習は元より、小テスト対策や宿題といった必須課題や、クラスの話題に乗り遅れないための最新の芸能情報のチェック、そして流行りのスマホゲームのイベントの消化と、やることが山積している。帰宅部の僕でさえこんなに忙しいのだから、運動部員なんかは宿題くらいしかできないんじゃないかとさえ思う。

そんな時間に追われる現状を打開するために、自宅がそこそこの遠い僕は、できることが限られている電車内での時間を最大限活用しようとして、この平行作業を実践しているのだ。

音楽は最近でてきたものをイヤホンで聞き流し

ていればいい。スマホゲームはレベルが高いから画面を見ずに適宜タップする作業と化している。

実質意識は殆ど単語帳に向けられているので、それらを同時に行うのは難しくなかった。

「ふうん、じゃあ一見三つのことを同じくらい意識しているように見えるけど、本当は英単語の勉強くらいしか意識しなくてもいいってことなのね」
「そうだね。ただ、聞き流してる音楽はループ再生してるから放置してもいいんだけど、ゲームはたまに意識して操作しなきゃいけない。まあそれだけでいいから楽だけど」

「うんうん、なんかそういうことをする気持ち、わかる気がする」

説明の途中に来了電車に揺られながら、彼女との会話が弾む。電車内ではなるべく静かにと言われてたけど、それを言った彼女がこうして聞いてくれるんだから問題はないはずだ。ああ、幸せだなあ。

そんな幸せな時間もうつまでもは続かない。電車が止まる。もう彼女が降りる駅についてしまった。これでまた明日になるまで会えなくなるなん

て嫌だなあ。

「それじゃ」

彼女は電車の外に。

「待つて」

僕もまた電車の外に出て、彼女の腕を掴んだ。

「えっ、どうしたの？」

「あ、その」

口ごもる僕の背後で、ドアの閉まる音を聞いた。こうなったらもう、引き返せない。

「その、家の近くまで、送るよ」

「……うん、わかった」

もう少し彼女のそばにいたくて、なんとかひねり出した言葉に、彼女は目を伏せて頷いた。照れているのだろうか。そうに違いない。だって僕はこんなにも顔が熱くなっている。

彼女の後を追って改札を抜ける。定期圏内だから料金は発生しない。財布を戻すとき、スマホ画面にGAME OVERの文字が浮かんできた。どうやらオートプレイでなく、ある程度僕からも操作しないとクリアできないステージだったらしい。けれど今は、はてしなくどうでもよかった。

僕は彼女の左、車道側を歩く。こうして隣で歩いているけれど、とても彼女の顔は見れなかった。できの悪いロボットみたいに、両手足を不器用に動かしながら歩く。

「寒いね」

話題に困って、そんなことしか言えない。返事はなかった。目だけ動かして窺うと、彼女は上着のポケットに手を入れて俯いている。

「……手、繋ぐ？」

この言葉を吐くのに三十秒の時間が必要だった。彼女と一緒に歩ける貴重な時間だけど、勇気を出すためには必要な時間だった。それでもかっこ悪く震えた声になっちゃったけど。

「……………」

彼女は無言で左手を出した。

ああ、今日は何ていい日だろう。勇気を出して本当に良かった！

僕は内心狂喜乱舞しながら、壊れ物を扱うがごとくゆつくりと、慎重に彼女の手に触れ、弱く握った。

「……………あったかい、ね」

「ん……」

彼女は視線を右下に向けている。僕も気恥ずかしくなって、顔を左上に向けた。

彼女の姿を見れない分、意識は彼女との繋がりに、今まさに彼女の左手を握っている右手に集中している。

彼女は何を思っているだろう。僕みたいにドキドキしているのかな？

ちらと彼女に目を向けると、まだ顔を背けていた。可愛い。

右手も暖めてあげたいな、と僕は思った。

あとかき

僕は高校生の時も文芸部だったのですが、その際他の高校の文芸部と作品を出し合う大会がありました。僕は一度もいけたことありませんでしたが。ともかくそういった大会で小説（というよりショートショート）を書いて発表するといったことがあったわけですが、当然分量制限がありまして、二段刷りの紙二枚に収まる程度の作品でないといけなかったわけです。短いなりに起承転結をまとめる力を養えたのかなあなど思っておりますでしたが、今回はそれを思い起こし、僕のパソコンではタイトル含め本文が丁度2ページに収まるように書いてみました。うまくまとまっていますかね？

さて、この作品についてですが、アイデアは電車の中で舞い降りました。僕も流行にもれず、電車内では時間つぶしにスマホをいじくっている身ではありますが、特にこちらから操作する必要のないスマホゲームをする場合、時たま飽きてきてもう片方の手で別のことをするということがままあります。それを基に何か書いてみるかあとと思い

至り完成したのが今回の作品となります。ちなみに殆どスマホで書きました。携帯小説ならぬスマホ小説です。

内容について。あとかきで作品の捕捉をするというのは禁忌ということとさらっとなぞる程度に留めます。今回は男性一人称視点で日常を綴ったものでした。そろそろ女性視点で書いてみようかなあ。日常系の作品を書く場合のネタはできるだけ身近な体験からすべきかと思いつつ大抵大部分を想像で構成してしまう僕にしては珍しく身近なものからとってきた作品なので、ああこういうのあるあるなどと思つて頂けたら幸いです。ちなみに作中の男の子の幸せな感情は百パーセント想像です。妄想です。

それでは今回はこの辺で失礼いたします。お読みいただき感謝感激です。

では、ジョーズでした。

松葉門

梟と鵲

1

かんかんかんかと踏切が鳴る。ごーつと勢いをつけて電車が走り去って、きいという軋んだ音と共に遮断機が上がり、みーんみーんと蟬の聲が戻ってくる。私の手元の麦茶がからんと揺れて、時おりその存在を主張する。

私の夏はこんな音でできている。

かたん、と聞き慣れない音がした。郵便受けに物が落ちる、懐かしい音だった。もう何年も聞いていない気がする。手紙は一年賀状も結婚式の招待状も含めてーすっかり廃れてしまっていた。私は積極的に手紙というものを守っていたこととは思わないが、手紙を受け取るのは嬉しかったことをまだ確かに覚えている。そして、時計ほどきつちりしていない郵便配達を基準に、午後という間延びした時間を二分していたことも。

縁側で突然立ち上がった私に妻が声をかけてくる。

「どうしたの？」

「いや、郵便を取りに行ってくる」

「全然気が付かなかったわ」

「耳が良いのは取り柄だから」

そうね、と笑う妻の声はもうキャンバスに向かつていた。

私はちよつと童心に返ってわくわくしながら玄関の戸を開けた。熱気が塊になって押し寄せてくる。この暴力的な暑さをなんとか凌ごうと日陰を踏んで郵便受けまで歩く。私と植木のかげふみといったところか。

郵便受けは錆びついていたが、なんとか開けることができた。

そして、私は入っていた封筒に触れたときに直感した。この封筒は黒だ、と。嫌な予感で心臓が煩い。

帰りはまっすぐ炎天のもとを最短経路で歩いた。じんじんと頭皮へ刺さる熱はもう気にならなかった。

京子、と妻の名前を呼ぼうとしたが、彼女はそれより早く私が帰ってきた気配を察して息をのん

だ。彼女の反応をみて、自分の手にあるものが黒封筒であることを確信した。夢であってくれ、という願いは空中に空虚に舞っていく。

「何も書いてない……黒封筒」

私の手から封筒を受け取り、京子は恐る恐る開封する。

「何も入っていないわ」

話の通りだ。私が父親から聞かされた突拍子もない話。都市伝説の類だと思って誰ともこの話をしたことがなかった、もちろん妻ともだ。

——宛先も差出人もない、空の黒封筒が届いたら、自分の子供を殺せ。封筒は燃やせ。

「ただの質の悪い冗談だよ」

「ええ、そうね」

上手く笑えているだろうか。胸の奥に湧き上がる嫌な予感を隠せているだろうか。

疑問に思わないこともない。彼女が思っている黒封筒の意味と私の思っている黒封筒の意味は果たして同じものだろうか、と。もちろん確認する

のは簡単だ。だが、彼女がただの悪戯だと思っている可能性もある以上、迂闊なこととは言えない。私のことを危険思考な人間だと思われても困るし、私が話すことをきっかけに彼女が殺人に手を染めるのも困る。つまるところ、私は十年近く一緒にいる他人が次にどのような行動を取るのか予測しきれないのだ。

「黒封筒について、ご両親から何か聞いていないかい？」

「それは……い、言えない。言えないわ」

些か不自然な質問だが、それに対して京子は驚くほどの動揺を見せた。

「聞いているんだね？ それは、……どんな内容だった？」

長い逡巡の後、彼女は重い口を開いた。

「だ、だって嘘ですもの……私は……こ、殺さないわ」

「やっぱりそうか。私も同じだよ」

少しだけ、安堵した。

「お、同じっていうのは？」

「どんなことがあっても飛鳥を守る」

「え、ええ、そうね」

互いにこれ以上話をしたくなくて、自然と背を向け縁側に戻ろうとする。

「封筒も始末しておいてくれ」

彼女の手に渡った黒封筒はそのままになっていたので、頼んでしまう。

「分かったわ、水に流すわね」

背筋がぞわつとした。え、と聞き返さなかった自分を褒めてやりたい。咄嗟に肩が跳ねたりしていないだろうか。

彼女は黒封筒に私とは違う意味を持っている。それが分かった。

麦茶はぬるくなっていた。

2

夫が黒封筒を持つて帰ってきたときは、息が詰まるほど驚いた。描いていた線がぐつと太くなつてしまった。こういうことがあると、朔弥が絶対に作品を覗かないことがありがなくなる。この絵の緻密な線の中で、不意に太さと勢いの変わった線は目立つ。

——宛先も差出人もない、空の黒封筒が届いたら、自分の夫を殺せ。封筒は水に流せ。

これが私が母親から教えてもらった内容だ。どうやら夫は娘を殺せ、というのが黒封筒の内容だと思い込んでいたようだ。うっかり殺さない、などと口走ってしまったが、対象が誰なのかまで漏らしてしまわなくてよかった。彼は飛鳥を守る、と言った。朔弥が人を殺せるほど残忍な男だとは思わないが、事実として伝えるべきだとは思った。そして万が一の時には、彼女を守ろうと心に決めた。

私は没になったキャンバスを取り外し、さんさんと輝く太陽を見て張り直すのは諦めた。次の作品のアイデアでも考えようかと思つたが、脳内は先ほどの黒封筒のことでもいいだった。

私の中で想像が先行して、縁側で動かなくなつた夫とソファで動かなくなつた娘が私を見ている。死んでいる、意志などとつくになくなつたただの物体なのに、その二対四つのビー玉は私を見てい

る。咎めるでもなく、恨むでもない。その無表情さは死者らしい、という点においてとても自然である。

結婚する前に一度だけ、朔弥のサングラスの下を見せてもらったことがある。彼の瞳は光を反射して、きらきらと輝いたが、死んでいた。動かない目は不気味でしょ、そう言つて彼は濃いサングラスで両目を覆つてしまつた。生きた人間の中に死んだものが埋め込まれている、それは私にとつて羨ましいことだつた。機能しない器官を持つている、それは勝者の証ではないのか。そんな言葉が喉まで出かかったが、無神経じゃないのと一般常識がそれを押しとどめた。あまり気にならないけどね、という当たり障りのない返事でその場を締めた。

「た、だいま」

がちやりという音と一緒に飛鳥が歸つて来る。

私は、未だ手に握りしめたままだった黒封筒を慌ててばらばらに分解した木枠と画布の山に押し込んだ。

「おかえり、飛鳥」

上手く笑えているだろうか。胸の奥に湧き上がる嫌な予感を隠せているだろうか。

「あれ、今日は絵を描いてないの？」

「失敗、しちゃつてね」

「ふうん。お母さんでも失敗するんだ。私、絵は描けないから本当にすごいなつて思うけど」

「普通に生活するには要らないスキルだと思うよ。今日は学校で何をしたの？」

ちつとも会話に集中できない。目を輝かせながら楽しそうに報告する娘の話の内容は、右から左へと流れていつてしまう。

「そうだ、飛鳥。見て欲しいものがあるの。ちよつと付いてきてくれる？」

話の流れをぶつた切った私に少し怪訝そうな顔をしたが、彼女はぴよこんと跳ねるように立ち上がった。

「何があるの？」

「見てのお楽しみ」

無邪気な笑顔を見ると、何があつても守り抜こうと決意が新たに湧いてくる。縁側と居間は空間

としてつながってしまったので、私の自室に移動する。流石に戸を隔てていれば、話の内容までは聞こえないだろう。感づかれてしまうのは仕方ないと捉えるしかない。基本的には誰もいれない空間に物珍しそうにしていた彼女は私の表情を見て、居住まいを正した。

「お父さんには内緒の話なんだけどね、空っぽの黒封筒が届いたの。しかも宛先はないのよ」

「黒封筒？」

「朔弥は、それが届いたら子供を殺せってお父さん、飛鳥のおじいちゃんに教えられたんだって」娘は黙って自身の三つ編みの先を弄っていた。

「そう……」

「朔弥はそんなことしないって言ってるし、私もいるから大丈夫だと思うよ。だけど理由はよく分からないし、不用意に怖がらせて悪いけど、あの時知ってれば……ってなることだけは避けたいからね」

情報のはかり手買い手の間で問題にされることが多いが、実際はどんな状況においても成り立っている。幼い彼女に聞かせたくはないが、

それは私のエゴでしかなく、彼女が身を守るのには何の役にも立たない。

「そう……お母さんは、おじいちゃんから何か聞かなかったの？」

これが十歳の女の子の持つ洞察力として平均的なのだろうか。私が娘と同じ年くらいのときは、夕飯のおかずと友達と遊ぶことを中心に世界が回っていたような気がするのだが。現在ちょうど二十歳より若い子は、教育プログラムの大改革以降の世代だ。彼らの物事の理解力は眼をみはるものがあるし、それを自分の尺度で捉えることはかなり難しい。私は本当のことを話すことにした。きつと嘘を吐いてもバレてしまう。

「私は……お母さんから夫を殺せって意味だつて教わったの……もちろん、そんなつもりはないけどね」

「それなら……お父さんは嘘を吐いているかもね」「え？ どういうこと？」

飛鳥はそれなら、と言った。今の話に明確な因果があつて選択した言葉だとしたら。

「お父さんはおじいちゃんから、妻を殺せって教

えられているかもよ」

どくん、と心臓が嫌な音を立てる。その可能性は考えなかったが、ありえない話ではない。

夫も娘もよく分からない。それをなかったことにしてしまえるだけの詰まった線を描かなくてはと思った。何を埋めるのかは自分でも分からない。

3

お母さんの部屋で衝撃的な話を聞かされた。驚きはあったが、一般的に求められる裏切られたと憤る気持ちには微塵もなかった。ただ正しく対処しないと面倒くさいことになるなとは思った。

お父さんが嘘を吐いているのでは、という鎌かけにお母さんはあつさり反応した。それなら両親で殺し合いが起きることになるが、私には関係ない。もちろん流れ弾に当たるように巻き添えを食らう可能性はあるが。

もう一つ有力な可能性としては、お母さんが嘘を吐いているパターンだ。この場合、私は家にいる間二人に命を狙われることになる。

残る可能性は、本当のことしか言っていないあ

るいはただの悪戯、といったところだろうか。嫌がらせだと思ふのだが、もし万が一違った場合に備えて状況は把握しておこう。

私は自室のベッドに仰向けに体を投げ出した。スプリングでふわりと沈む感覚が心地良い。私は自分に想像できない可能性が無限にあるのを実感しながら、それでもあまり他の可能性を考えなくていいのは知っている。お父さんもお母さんもうに成人しているからである。

二十年前に政府主導で大規模な教育改革が行われた。内容は実に簡単で、コンピュータからの逆学習がメインに据えられるようになったことだ。その方法は、日常生活においてなくてはならない存在になった拡張現実、過去のデータを一瞥できるように表示しておくだけである。その何が効果的なかと半信半疑だった政府高官を尻目に、教育は目に見える形で成果を挙げた。情報の取捨選択の速度の改善は、大げさに言えば人間の在り方を徐々に変えていくことになった。

つまり、受けた教育によって二十年前に一度人間は分断されているのである。そこに血の繋がりが

があらうとあまり関係はない。まだ過渡期の世代だから個人差があるが、直に淘汰され画一的な人が出来上がるのだろう。コンピュータが出す最適解を元に学習する以上、到達点が似通ってくるのは当然とも言える。この世代が裏をかこうと目論んだ場合、ほとんど全ての可能性を候補にいれてくるから逆に行動が読めない。

お母さんが裏をかこうと画策していたとしても、逆学習済みでない世代であることを考慮さえすれば、裏をかいだ結果はいくつかの予測可能なパターンの中に納まる。

ただ、祖父母四人と両親が健在なのはどこか矛盾していた。そもそも人を殺せ、という伝言の拡散力はとても低い。

大規模な感染症を引き起こすウイルスは別に致死率が極めて高いわけではない。保菌者が死んでしまったら意味がない以上、ほどほどのところで手を打つ必要がある。

そしてもう一つ、どうやって配達したのかという問題も残っている。封筒は足のない無機物のだから、誰かがポストに配達したのだ。

私はばつとベッドから起き上がった。

上がり框に引つかかった靴に少しいらいらしながら、玄関の戸を開ける。クーラーで冷えた体で屋外に出ると、外の景色が暑さでゆらゆらして見えた。

庭師のおじさんは多分今日はいないし、誰かポストのそばにいないかと思つて出てきてみたが無駄足に終わりそうだ。

「飛鳥ちゃん、どこかへでかけるの？ 気を付けてね」

そうだ、宏斗さんは庭にずっといたかもしれない。宏斗さんというのは、うちのお庭が素敵だから絵を描かせてほしいと三か月くらい前にやってきた美大生だ。時おり庭で姿を見かけると、こうして声をかけてくれる。

「ううん。ねえ、宏斗さんはいつからここにいたの？」

「ん？ ええつとね、お昼過ぎからいたかな。いやあ、暑くて暑くて……溶けちゃいそうだつとよ。今は随分ましになった。どうして？」

「郵便配達の人、来た？」

「郵便？ いや、今日は裏庭にいたから分からないな。何か待ってるの？」

「いやそれならいいの。ありがとう」

宏斗さんに手を振って別れる。収穫は何もなかった。まあ小説ではあるまいし、そうそう簡単に目撃情報が入るわけもない、そう自分に言い聞かせる。

違和感だけが積もり積もって、暑さで溶けることもなく陽炎のように揺らめいていた。

4

朔弥さんに飛鳥ちゃんから郵便について聞かれたら知らぬ存ぜぬの一点張りで通してほしいと頼まれてすぐ、僕は彼女を庭で見かけた。試すような気持ちで声をかけると、彼女はピンポイントでそのことについて問うてきた。

普段は年相応にここにこ笑っているのに、今日は真剣な眼差しをしていた。まっすぐに澄んだ空気を纏っているのが印象的だった。

「北野です。飛鳥ちゃんに声をかけられましたよ。ねえ、一体何があるんですか？」

「ああ……えっと、その、すまない」

朔弥さんははっきりしたことを何一つ言わずに、一方的に回線を切ってしまった。謎は深まるばかりだ。彼は僕の大学で教鞭をとっている水原先生と旧知の間柄だということもあってあまり強く出られない。

僕が昼間、裏庭で写生していたのは本当のことなので、飛鳥ちゃんに嘘は吐いていない。ただ彼の態度は不審だった。

「北野さん」

今日はよく声をかけられる日だ。一言も発せず絵だけ描いて帰る日もあるというのに。

「京子さん。どうかされましたか？」

「何のお話ですか？」

「え？」

「え？ 飛鳥から、北野さんが呼んでいたと聞いたのですが……」

おかしい。僕は京子さんに話はない。飛鳥ちゃんが何かをでっちあげていることが分かる。

「いや……」

僕は呼んでないです、そう続く言葉を寸でのと

ころで飲み込んだ。朔弥さんとのやり取りを経て、飛鳥ちゃんの肩を持つとうと思ったから。あの子は、母親にも父親にも隠れて何かをしようとしているという確信があったから。

「すみません、急ぎではなかったんですけど……一昨日、すごく風が強かったじゃないですか？それで飛んできたんじゃないかなってものがあって……見てもらえますか？」

「あら、わざわざありがとうございます」

すらすらと嘘が飛び出す自分の口に失望しながら、彼女を裏庭に案内する。飛鳥ちゃんが一人で何をしようとしているのかは知らないが、あの十歳とは思えぬ頭脳の女の子は上手くやっているだろうかと無用な心配をした。

5

お母さんに宏斗さんが用があると書いていたと伝えた後、私は迷わずキャンバスの下を探した。失敗だと自分で思っても、それが味だと評価されることもあるしねと笑うお母さんはほとんど絵の描き直しはしない。だから分解されたキャンバス

を見たとき、すこし意外だなと思ったのだ。

帆布のガザガザした質感の中で紙を手探りで見つけるのは簡単だった。ゆつくりと手を引き上げば、掌に黒の封筒があった。これがお母さんの言う黒封筒なのだろうか。縁側に腰かけるお父さんの背中が見えるので、きっと私がいることは気づいているのだからけれど何をしているのかまでは分からないだろう。

宏斗さんがどこまで気づいているのか、どれくらいお母さんを引き留めてくれるか分からないので逃げるように再び自室に戻る。

封筒には何も書かれておらず、ただの真っ黒な封筒だった。不気味だとは思うが、何の意味も持たないようにも思える。

とりあえず証拠はこれしかないので封筒をスキヤンして、私は驚くことになる。

そこには蜜柑液と明礬液で別の内容が書かれていたのである。もちろんこの短時間で成分分析ができるわけではないので、正しくは過去に蜜柑液・明礬液で書かれたものと比べた結果似ているので蜜柑液・明礬液で書かれた可能性が高い、と

いふべきなのだが。コンピュータの学習の方が賢いのだから、素直に信じて話を進めよう。

蜜柑液で書かれていたのはこうである。

——君が子供を殺さなくてはいけない理由は、君自身のためである。子育てを終えた前の世代は、次の世代にとって不要だからである。次の世代はいずれ君を殺す。そのための自己防衛である。

明礬液で書かれていたのはこうである。

——君が夫を殺さなくてはいけない理由は、君自身のためである。子育てを終えた前の世代は、次の世代にとって不要だからである。次の世代はいずれ君を殺す。そのための自己防衛である。

この封筒に隠された内容を二人が知らないならば、お父さんもお母さんも何か積極的に行動を起こすとは考えにくい。私は自分の命の心配はしなくいいと判断することにした。ほんの少し、体から力が抜ける。

ただ、これの差出人にうつすらと心当たりができた。彼らの男と女、親と子に対する考え方が一般的なものでないと良いと思う。幼稚な願いだけだ。

涼葉千里

シロイハナ

「おはよー!」

ガラツと勢いよく扉を開け放ち、少女は大輪の花のような笑みを浮かべ言った。朝いちの挨拶は欠かさずに、それがこのクラスの標語だ。高校生にもなつて随分ガキくさい標語もあつたものだと皆思つたが、二つ大きなテストを乗り越えた頃には皆これを恒例行事として受け入れ、毎朝毎朝元気な挨拶がやまびこか何かのように飛び交つてゐた。

けれど、今日は何かがおかしい。

「……おはよう?」

訝しがりながらも笑顔は崩さず、少女は繰り返す。

しかし、誰からも返つては来ない。どころか誰一人少女の方を見てすらいなかった。

「ねーみんなどうしたのさー?」

教室の扉から一番近い机など歩いてたかだか数歩ほど。聞こえないはずはないというのに、やはり何も返つてはこない。

これは何かおかしい。とは言え教室の一步手前で延々立ち尽くすわけにもいかない。ひとまず荷物を置いて、それから周りのやつらにもう一度聞けばいいか。そう思い直し一步踏み出した瞬間。笑みが枯れ落ちた。

代わりに咲き誇るは一輪の花。

少女の机に飾られた、真つ白な一輪の花だった。

さて、どうしたものだろう。というかこれどういう状況なんだろう。ホームルームも始まり一応は席に着いたものの、先生の話はどこも引つかかることなく通り抜けていった。ごめんね先生話なら今度ゆつくり聞くよ。

こてんと首を傾げた少女の目に映るのは、白い花。それは何度瞬きをしてもすかしてみてもはたまた狐の窓なんてのをやってみても変わりはせず、無理な格好をして指を痛めるだけに終わった。

しかし指の痛みと引き換えに、分かったことがある。この花は見間違ひでも幻覚でもオカルト的なものでもなく、ちゃんと現実に存在しているものらしいことだ。

だとしても、なぜ花が机に置いてあるのだらう？ それも真つ白な花。

「……いたずらだよね？」

ひとりごち、花瓶ごと花をどけようと前を見ると、斜め前の女子と目が合った。

ねえ、これ置いたの誰。いたずらにしてはやりすぎでしょ？

言おうとして口を開いたが、それは彼女の予想外の行動に遮られた。

彼女は合った視線を即座にそらすと、俯き、ふりと肩を震わせたのだ。風いだ水面に投じられた石。その波紋は広がり、いつしか皆同じように肩を震わす。

彼らの顔は見えない。けど分かった。

皆、皆、笑っていたのだ。

そして少女はふと気づいた。

これは世に聞く「いじめ」というやつなんじゃないか、と。

考えてみれば机の白い花や無視なんて古典的ないっす陳腐ですらあるいじめのテンプレと言える

だろう。だが、まだ確信には至らない。白い花：はいいたずらだとして、無視は本当に気づかなかっただけ、そして皆が笑っていたのは別件かもしれない。

あまりに希望的な観測ではある。けれどこれだけでいじめと断ずるのは被害妄想が強すぎるような気がして憚られた。

「まさか、ね」

ぼつりと漏らした声に被せるように授業開始を告げる鐘が鳴る。いつもならば鐘の音が止むか否かといったところには寝落ちる少女だったが今日に限ってはぐるぐると渦を巻く思考に睡魔も飲み込まれたようで、寝起き以上に目も頭も冴えわたっていた。

そしてそのせいで、いやそのお陰でと言うべきだろうか。少女は気づいてしまった。

自分の手元にプリントが届いてないことに。
前で、

「三枚とも裏表ちゃんとあるか確認してね」

なんて先生は言っているが、少女の机には確認するも何も一枚たりとて紙はない。あるのは例の花

くらいのものだ。

「先生、プリントないです」

わりかし大きな声で言ったが、都合の悪いことにほぼ同時に前列の男子生徒が馬鹿騒ぎを始め、一番後ろの席に座る少女の声はかき消されてしまった。一枚余ったと申告するものもなく、仕方なく席を立ち教卓まで向かうも、やはり先生の注意はそちらに向けられ、少女の方など見向きもしない。

「先生、プリント、ないんですけど」

それでもやはり聞いてはもらえず、どうしようかと視線を逸らせば教卓の上にプリントがきつちり三枚置かれていた。おそらく予備か何かだろう。

「これ、もってきますよ」

確認もそこそこに三枚を順番にとつて、すれ違う机々を目の端に映しながら急ぎ足で戻る。

しかしその足は少女の席を目前にしてピタリと止まった。振り向き見るのは、ちょうど前の席。その机の上には、まぎれもなくプリントが二セツト置いてあった。

まさか、自分の分を、止めていた？

驚愕して見つめる視線に気づいたのか、彼女は口の端をゆるりと持ち上げた。

「なあんだ、つまらないの」

死刑執行の合図。それは小さな笑みと共に、静かになった教室にひっそりと響いた。

それから授業の中身はもちろん、その日をどう過ごしたかすら少女は覚えていない。ただどの授業でも配布物は少女まで届くことは無く、休み時間でもまるで少女が教室を彷徨う幽霊にでもなったかのように、それはもう当然の如く無視されたことだけははつきりと覚えている。

懸念は確信に変わった。

けれどだからと言って何かことを起こそうとは思わない。今回のようなことは初めてだから、慣れているとは言えない。けれど奇異の目で見られることは少女の境遇ではままだることだったからだ。

「からかってくる子はね、相手が反応するのを見て楽しんでるんだよ」

小学生のころ父がいないことをからかわれ泣い

ていた少女の頭を優しく撫でて、母は言った。

「だから言い返したり、泣いちゃったり、そんなことしちやダメ。徹底的に無視するのが一番。そうすればそのうち飽きてやめるから」

それからは母の言葉に従いからかいの声も何も完全に無視するようにしたら、いつの間にかやらそれはピタリとやんでいた。みんなが家庭の事情を理解できる年になったこともあるとは思いうが、母の言葉通りにしたおかげでもあると少女は思っている。

母の言葉に間違いなんてない。何せ自らを女手一つで育て上げた、誰よりも強くて立派な、自慢の母だから。

だから今回も、前とは逆の状況ではあるけどやることは同じ。向こうが無視するのなら、自分も無視するだけ。

そうすれば、いつかは終わる。

きつと前みたいに笑って過ごすことが出来るはず。

そう信じて夕闇の迫る仄暗い一本道を、少女はただ一人進む。

ぽつかり空いた両隣にほんの少し寂しさを抱きながら。

それからというものの少女は徹底的に無視無言を貫いた。流石に授業で指されても無言とはいかないが、運よくと言ってよいのか悪いのかこのところ少女が指名されることはとんとなかった。

そして一か月がたち木々は燃えるような紅や煌めく黄金へと色鮮やかにその身を飾ったが、少女の非日常は何も変わらなかった。相も変わらず配布物は少女まで届かないし、グループワークでもひとりぼっち。偶数だから余るはずがない高をくくっていたがわざわざ三人組を作ってまで省いてきたには驚かされた。休み時間も一人なら帰り道も、帰ってからも一人。

帰ってから、に関しては母が夜勤になってからずっとなので特に非日常というわけではないけれど、しばらく人と話さないという環境はじわじわと、しかし確実に少女の精神を蝕み削り取っていた。

なんで、私は母さんの言うとおりにしてるのに、

なんで。

ただその言葉だけが脳内に螺旋を描き巡り巡る。けれど少女は他にやり方を知らない。ただ、先を信じて無視を貫く。

それを裏切るように、木々の装いも落ちる頃事件が起きた。

視線の先にはあるのはデフォルト状態の、資料集も体操服も物理で作った偏光器も何も入っていない新学期に明け渡された時のまっさらな姿に戻ったロッカー。

「……ない」

奥の方を漁るまでもなく一目でそうと分かった。いったい、いつの間に。

しゃがんだ姿勢のまま固まるその後ろを、クラスでも派手な方に分類される女子グループがキヤイキヤイと甲高く笑いながら通り過ぎた。

「ねえ、あそこ」

そのうちの一人。校則ギリギリまで染めた髪をクルクルといじっていた女子が、その指をついとこちらに伸ばす。

「ああ、もう片付いたんだ。早いね」

「むしろ遅い方じゃないの」

顔は見えない、けれど想像の中の彼女らは一様に嘲りの笑みを浮かべ、にやにやとこちらを見下していた。

ふいと見上げればもう彼女らはもういなかった。代わりに今度は彼女らとは真逆の子。地味で目立たないけど、優しい。優しかった友達がこちらを見下ろしていた。しばらくぶりにまじまじと見たその顔に浮かぶのは何だろう。恐怖とも驚きともつかない、なんとも言えない難い表情だった。

その久しく見ていない自分に対する反応に、少女の決心が揺らいだ。もしかしたら、彼女なら答えてくれるかもしれない。

「……ねえ」

少し痛む喉をおさえて出した声は自分でも驚くほどに掠れていた。

「私さ、何かしたっけ」

俯いたまま声を詰まらせ、一歩後ずさった彼女を逃がすまいとずいっと身を乗り出し迫る。一度出してしまえばもうそれは収めることなんてできなかった。

「なんで、なんで、なんで私なの？ 私何もしないよね？ 何もしてなかったのが悪いの？ なんで、なんで、なんで」

なんで、なんで、なんで。

一言口に出すたびに足音荒く踏み出す。私は前に、彼女は後ろに、繰り返すうちについに窓際ギリギリにまで来ていた。

「ねえ、なんでなの？」

なんでの嵐にも負けず、彼女は口を閉ざしたまま。

面白くない。

「ねえ、答えてよ——」

半ば叫ぶように言った言葉を払いのけるように彼女は腕をぶんと振り払い、まっすぐにこちらを見た。

「気づいてたよずっと、ずっとそこにいたの」

ようやく返ってきた反応に思わず唇を歪ませる。やっぱり、彼女なら応えてくれると思ってた。

そうだよ、私たち友達だもんね。

そう、言おうとした。けれどそれは続く言葉に消された。

「ずっと、黙ってたから無視してたのに。なんで寄ってくるの」

真っ直ぐに見つめる目。そこには、明らかな怒りが込められていたことに、少女はようやく気付いた。

「来ないで。さっさと行ってよ。キモイんだよ」

最後の方はほとんど狂ったように、泡を飛ばしながら言い放つ。そのまますり抜け走り去る彼女を追うこともできず、ただ少女は呆然と立ち尽くした。

「ねえ、あれ見た？」

「駄目だよ」

「あの子、可哀想に」

こちらを指さす子。それを窺める子。走り去る彼女を不安げに見やる子。その他大勢の視線、視線、視線。そして。

未だ衰えず咲く真つ白な花。

それらすべてがまるで少女に「馬鹿だね」と言っているように思えて。

「いや……いや……どうしてっ……！」

少女は後ろで鳴り響く鐘の音も無視して、ただ

「……あれ？」

さつきとは違つて表情は変わらない。なのにそれ以上に大粒の涙が滾々と湧き出る泉のように途

切れることなく頬を伝っていく。

「……！」

ようやく気付いたのかこちらを見やる母に、それでも頑張つてにこやかに笑む。確か、この笑顔が好きって昔言ってたよね。

「じゃあね」

「——待って、いかないで！」

こちらに向かって手を伸ばす母に背を向け、来た道を飛ぶように駆けていった。

屋上って鍵かかってないんだ。

誰にも会うことなく思ったよりすんなりと入れたことに内心驚きながら、少女は柵へ向かって歩を進める。今まで事故が起こつていないことが不思議なほどそれは低く、足をかければ簡単に乗り越えられた。

どうせこうなるなら、最初からこうしておけばよかったかもしれない。見下ろせば一面がアスファルトの鈍色に覆われていた。特に今立っている真下はかなりごつごつしていて、普通に転んでも肉が抉れて相当痛いだろうことは想像に難くない。

まして落ちたりした日には、死は免れないだろう。

でも、それでいい。

もう日常は戻ってこない。なら、完全に壊してしまえ。

さようなら、私の非日常。

躊躇うことなく何も無い空へ踏み出した。

「危ないじゃないか！」

屋上にはたいつの間にやらくさんの人が集まっ
ていて、そのうちの一人がふらふらと所在無さげ
に彷徨う少女の手をがっしりと掴んで引き戻す。

……なんてご都合主義な、小説のような展開が
起きるはずもなく。

ぐらりと傾いた上体は重力に逆らうことなく真
つ逆さまに地面がけて落ちていく。地面より一
足早く、血塗れた紅に染まった空。その向こう側
を指し煌めく光の粒がぼたり、ぼたりと昇って
いった。

綺麗だな。掴めるかな。

伸ばした手は落下の勢いに抗えず歪に曲がる。

「……やっぱり、届かないか」

浮遊感に飲み込まれ暗く霞ゆく意識の中、少女はぼつりと最後の雫を落とした。

「ねえ、知ってる？ 隣のクラスの噂」

「知ってる知ってる。例の子のでしょ。確か二か月前と前だっけ」

黄昏時特有の淡く妖しげな光の中、教室の隅に影三つ。話に花を咲かせ、鈴を転がしたように高く甘やかな声が練習終わりの気だるげな空気に響く。

「二か月前……ああ、あの子のことか」

「そう、その子のこと」

「本当に可哀想だったよね」

三人が三人して顔を見合わせ、頷き合う。

「だつてねえ……登校途中に居眠り運転にはねられて、なんてひどすぎるよ。当たり所悪かったせいで、多分即死だったって」

「当日とかみんな泣いててクラス全体既にお通夜みたいだったっけ……つてうるさい人はうるさかったか」

「まあアレはアレで場をどうにかしたかっただけみたいだけど。あれでちよつとは気が落ち着いたつて子もいたし」

でもまさか、その子がねえ……。

ひそひそと内緒話染みた素振りの二人に、一人きよんと首を傾げる。

「その子が、どうしたのさ」

まるで獲物を見つけた猛禽類のように、おしやべりな二人は目を弓型に細めにんまりと口元を吊り上げた。

「でるんだってさ、その子の幽霊が」

「何それ。バカバカしい」

「でもさ、今日飛び出してっつた子。あの子見ちゃったらしいよ。ぐつちやぐちやでぐつじゅぐじゅの子が迫ってきて……」

「やめて、リアルに想像しちやっつたじゃん」

まあぐつじゅぐじゅは嘘だけなんてニシシと意地悪く笑う少女。ぐつちやぐちやは否定しないんだって言葉は喉の奥に仕舞った。もし肯定されたらと思うと背筋を冷たいものが走る。

「それになんかその子のお母さんも見たらしいよ」

「え、それいつの話」

「今日よ今日。さっき先生が言ってた。家に帰って来ただのこっちに向かってただの大変だったって」

「でもたった一人の愛娘亡くしたんじや、ねえ。そんなにまでなる気持ちも分からなくないかも」

二人の噂好きはいつものこととはいえ、流石に死人をネタにするのはいただけない。加速するおしやべりに加わる気にもなれず、窓辺によりかかった。

「でもさ、死んだなら死んだでちゃんと逝くとこ逝けって感……」

不自然に途切れた会話。不審に思い見やるとそろって目を丸くしこちらを見ていた。

「はっはーん。騙そうったってそうはいかないよ」

「違う……今……後ろ……」

先の不敵な笑みはどこへやら、今や色という色を失ったような面差しでこちらを見つめている。こちら、というより正確には丁度少女の真後ろの窓の向こうを。

後ろに向き直るも何ら変わったところはない。

「後ろったって何にもないじゃん」

言い切るか言い切らないか。

べちやり。

粘っこい音が、真下から聞こえた。

「……は」

言いようない恐怖につま先から頭にかけてぞわぞわと、霜がかかったような感覚に襲われる。今の、音は。

「……ねえ」

不安げに曇ったアルト。振り返ろうとして、はたと気付く。

ここには、ソプラノしかないはずじゃ？

「ねえ、ねえ、ねえ」

まるでそれしか言葉を知らないように、繰り返す。そういえば後ろの二人はどうしただろう。恐る恐る、視線をできる限り下にやって、後ろを――

「ねえ、聞いてよ」

絹を裂いたような叫び声が、学校中を駆け巡った。

それからというもの、この学校には今でもこんな噂が流れている。

噴き出した血のように鮮やかな空の日には、道連れを求め手招きしながら落ちていく少女の霊が現れるらしい。

あとかき

おはこんばんちは。去年の冬からまともに入部した二年生の千里です。

ものすごく唐突ですが、私は驚きとかサプライズとかどつきりとかそういったものが大好きですとあるゲームのとおる真っ白けつな刀にハマって感化されたとかではなく、ハマる前から大好きですむしろ驚き大好きな姿勢に親近感覚えて気づいたら推していたくらいです。いやもちろん驚きを追う白い鳥以外の本丸の皆も大好きというか強いて言わなくていいなら箱推しです。うちの初期刀は今日もこじらせ可愛い。去年の今頃はまさか現物見に行くほどハマるとは思わなかった。

……脱線しましたが、ぎゅつとまとめると私は驚きが好きです。なので、作品も最後に驚きをもつてくるような仕様にしています。というか気づいたらそうなっています。毎回毎回起承転結の転がやたら遅くにやってくる、そのまま結にしけこむ感じですね。

今回のお話もそんな感じになっています。

【ここから先話の内容のネタバレあり】

死に気づいてない幽霊にとつて自分を無視する周りの人はどう見えるんだろう、というのが今回の話の元になった発想です。

置いてある白い花、無視してくる同級生たち。なんかこれいいじめに近くないかな、と思ったら勝手に指がタイピングを始めてました。

ただこのネタ自体を思いついたのはずいぶん前のことで実はこれ高校時代に書いた作品のリメイクでもあります。けどその時とはだいぶ展開も結末も変わってしまった。高校時代の方では少女をつなぎとめたかった親友が少女を誤魔化し執着させて飼い殺すメリバ。今回は誰にも受け入れられず普通にバッドエンド。

どうあがいても鬱々しさまっしぐらでした本当にありがとうございました。ただ書いてる途中は勝手に何度も主人公がポジティブシンキングし始めていたので、今度またこのネタで書くときはちゃんとハッピーエンドになるかしれません。まあ主人公もう死んじやってるんでどうにもなりま

せんが。

あとそうですね、書いてて自分でもわかりづら
いなと思ったところがありまして。序盤の方のプ
リント二枚持ってた子なんですけども、あれは単
に先生が少女がいないのを忘れて、というか普段
の調子でプリントを配っちゃって余っただけです。
あとつまんねえってのは前のバカ騒ぎが終わった
ことに対してです。最初はまともに説明書いてた
のですが諸々の都合でその描写削っちゃったので
ここで補足しておきます。

さてそろそろ紙面も残りわずかとなりましたの
で、ここらであとがきという名の駄弁りを終わら
せていただきます。

つと、最後に一つだけ。

ぐちゃぐちゃのという表現どおり事故当時の R
・18 G 状態か、はたまたそれも嘘で普通にきれい
な状態か。

少女の姿は果たしてどちらだったのか。それは
読者の皆様のご想像にお任せします。

それでは、次の機会までさようなら。

ロータス

きもだめし

「お、おいちゃん！ ま、待ってたよー！」

真つ暗闇の校門から、聞き慣れた声が聞こえた。

「ごめんごめん、遅れちゃって——ってうわっ！」

私が校門に近づくや否や、茜の質量で進んでいた方向とは逆に突き飛ばされた。どんだけ力あるのよ。

「いたた……」

「ごっ、ごめんおいちゃん！ でもわ、私……、

怖くて……」

「大丈夫よ。私が遅れたのが悪かったし……」

か細く震える声は恐怖に打ち克ち、やっこのこととで出されていることが即座にわかってしまい私には何かしら罵倒の類いを茜に浴びせることなんてできなかった。

「ま、それはいいからさ、どいてくれる？ 私が

動けない……」

「あああわわあああわわどきますどきます、ごめんね私が重いから……」

「違う違う、単に私が非力ってだけよ」

今にも消えてしまいそうな雰囲気、一瞬にして楽しく混乱となる。私の弁明を聞き、その混乱もすぐに安心したように落ち着き、身体をどしてくれる。

この陸奥茜という女の子は中学生の頃からの付き合っただけで、いつ見ても面白くて飽きることがない。目に見える感情がころころと変わるのである。よくもまあ、そんなにいいそいそと頭を切り替えられるなあと私は感心している。

「？」

見つめていると、きょとんとして首を傾げた。仕草がとにかく可愛らしい。結婚したい。結婚したいよ。

「どうしたの、おいちゃん？ 行かないの？ 私としてはそっちの方が嬉しいというかありがたいというか、なんだけど……」

と言われ、私は我に返った。そうだそうだ、茜の可愛さに思わず忘れていた。

「あつ、うん。行くよ。行く行く」

そう——こんな夜中の学校に来たのは、伊達や酔狂ではなく、『肝試し』をするためだ。いや、肝

試しは伊達や酔狂ではないのかと言われればそれは微妙なところではあるのだけれど……。

とにかく今夜、私こと出海葵は、親友・陸奥茜とともに『七不思議』を求めて私たちが通う高校に繰り出したのである。

腕時計を確認すると、針は九時二十五分くらいを指し示していた。



この学校には、いわゆる『七不思議』があるらしい。

『七不思議』の噂は一学期の期末試験も終わり、夏休みに入る前からにわかに立ち始めた。

それは、夜中にひとりで鳴るグラランドピアノであったり、上りと下りで段数が変わる階段であったり、自律して動く理科室の人体模型であったり、図書室にあるという読むと呪われる本であったり、目が光るベートーヴェンの肖像画であったり、映った像が好き勝手に動く鏡であったり、開かずの扉であったり。

これがうちの学校の『七不思議』だった。ありきたりな、どこにでもあるような怪奇談ではあるが、なんだかんだで七つなかったり七つより多かったりする七不思議業界においては、律儀にちゃんと七つ揃っているところはポイントが高いと評判だ。七不思議業界なんて初めて聞いた。

どこからともなく現れたこの『七不思議』はその突拍子のなさゆえに妙にリアルで、多くの生徒の下校の足を早めたわけだが、しかしいまの私にとっては非常に利用しやすいものであった。

今夜私が茜を連れて夜の学校に来ているのは、この『七不思議』の真贋を確かめるためである。

当然の疑問として、なぜそんなことをするのか、と思うだろう。それはなにも私たちがオカルト研に所属しているとか、七不思議の被害で死傷者が出ていて生徒会である私たちが若い正義感で調査を行なっているとか、そういうことではない。そもそも私も茜もオカルト研や生徒会にはなんら関連のない一般生徒だし、死傷者なんて出ていない。

なんでこんなことをしているのかと言えば、そ

れは――

「ひやつ！ おいちや、おいちやん！ い、いま、人体模型、ほんとに動かなかった」　　びくって！　　びくびくって！

「あ、ごめんごめん、見てなかった――」

「ねえええ、おいちやん頼むよお。私ほんとこわいの無理なんだってば、言ったでしよ」

茜が半泣きで私の右腕に抱きついてくる。ああ。かわいいなあ。すっかり怯えた顔もかわいいんだから。

賢明なる人ならばお気づきだろうが、こんな時間こんな場所に来ている理由はこれである。すなわち、茜の反応を鑑賞するため、だ。七不思議の真贋を確かめるだというのは建前ではない。

茜は怖がりだが、「二人じゃ心細いの！」と言う私の弁明――それは七不思議探しの動機を含まないにも関わらず――を聞いて、良い子な彼女は私のためについてきてくれたのだ。「友達だから」。彼女ならそう言うのだろう。可愛すぎる。

「ちよつと！ 聞してるの？」

見れば茜は頬を膨らませてむくれ顔。怒った顔

も愛らしい。

うんうん聞いているよと頷いて見せたら膨らんだ頬はしぼんでもちもちほっぺに戻ってくれる。

「あー、そうそう。人体模型だったわね……」

正直、七不思議に興味はない。だって茜の挙動言動が見られればそれでいいんだもの。

『七不思議』は今夜の肝試しの肝。知らぬ存ぜぬでは通せない。しかし私自身、科学の熱心な、とはいかないまでも、そこそこの信徒なのだ。怪異の実在を信じているわけではない。

さて、いま私達がどこにいるのかというと、理科室だった。理科室特有の黒い耐火テーブルの列の奥――そこに人体模型がある。これが動くというのが『七不思議』の一つだ。

「で、動いたって？　ほんと？」

「おそいよつ！ 言ってるでしょ、私は見たの！　びくびくーって！」

びくびくーって、それはどこがどういう動きを表しているのだろう。茜が「びくびくー」という音を発して謎のジェスチャーを披露しているのが可愛いのでいいのだが。

「なにその信じてなさそうな顔は……。もー！
ちゃんと見ててよね！」

怒らせてしまったかな。少なくとも、先ほどまでの怯えの感情は今の感情に塗りつぶされてしまった。

茜が指さす方——つまり人体模型を見てみる。
光源が非常灯くらいしかない暗い室内で月明かりに照らされ、その顔の立体が生々しく陰影で描写されている。月光による光沢。ロマンチストならば神秘的、オカルティストならば不気味だとか言うのだろうか、私にはただ物理的な存在でしかない。

しかし茜がそうではないことは知っている。彼女はロマンチストやオカルティストの側面を持つ普通の人間である。だからこそ肝試しが効果を発揮する。

「……近づいてみる？」

「えっ、ええっ！ あーっ、うーん……。えっと、うん、まあ、そうだよね。『七不思議』がほんとにかウソか確かめるためだものね……。近づこうか……」

とても嫌そうである。可愛い。恐れを抱きながらもほんのちよつとの勇敢さを含む表情、たまりません。

私を盾のようにしながら、茜が後ろから私の右腕をぐいぐいと押してくる。その力には抗わず、ただその茜らしい筋力を堪能していた。

人体模型が近づく。

近づいてみれば、片方の、『内側』を晒している方の目玉が私達を凝視していた。少し左右に動いてみても、模型の目線は追ってきた。おそらく錯覚の類だろう。ペーパークラフトのアートでそういうトリックを見ることがある。

人体模型が、手を伸ばせば触れる距離にまで近づいた。

しかし、人体模型が『びくびく』どころか微塵も動く気配はない。

「動いてないじゃないの」

「えー、だってさっきは動いてたように見えただけどー……」

おかしいなあ、と茜は言う。

そもそも、『動く』人体模型というのが曖昧すぎ

るのだ。手足が自由自在になるのか、それとも理科室を徘徊するのか——何をもって『動く』と言われているのか。

「やつぱり、にわかな噂なんてウソに決まってるよね——ただでさえ、七不思議なんて胡散臭いの」

「でも、本当だったら大変だよ？ 学校の平和は私達が守らなきゃ！」

いつの間にか謎の正義感に燃える茜だった。萌える。しかし、『七不思議』が本当だったとして、一体何が大変なのだろう？ そして、私達にできることはあまりないと思うのだけれど。

悶々と思考を捏ねながら茜を鑑賞していると、またむくれ顔が目前に映った。

「ねえ！ ちゃんと見ててってば！ なんかいいばわかるのー！」

しまったしまった。また無意識に茜を見つめてしまっていた。いや、それが目的だから良いのだけれど、当の茜の機嫌を損ねるわけにはいかない。人体模型を見てみる。何度見ても人体模型である。さきほどまで顔の方しか見ていなかったため

に今気づいたのは、それが筋肉の模型ではなく内臓の模型だということだ。肺や胃、腸や腎臓などの臓器が赤黒く輝いている。こちらも顔と同様に月光による陰影の効果が出ているようだ。

「うーん、動かないねえ？」

茜の首を傾げる動作が、腕の感触で伝わってくる。きつと、下唇を前にせり出した『拗ね』の表情をしていることだろう。飽き始めているのではない？
「……次、行こうか？ これ以上いても仕方くない？」

「えー！ でもさっきは確かに動いてたように見えたんだけど……」

私の提案はお気に召さなかったようで、茜は未だにかの人体模型にご執心である。

仕方ない、私も人体模型を見つめ直そう——と、したそのとき。

ぴくぴくと、陰が、動いた。

——ように見えた。

「うつひやあああああつ！ やつぱり動いた

よ！ 助けておいちゃん！」

甲高い悲鳴が上がり、私の腕を抱き締める力がいつそう強まる。茜の柔らかな感触が心地よい。というか、さつきまでの学校を救おうと言つていた勇ましさはどこへ行ったのか。

「……はあ。そういうことね……。大丈夫よ、親愛なる我が友」

「く、くうーん」

わざと大仰な風にセリフを言いながら、茜の頭を撫でる。パニックに陥つていた表情はみるみるうちに馴けられた飼い犬のそれになった。従順。安堵。そういったものに。

「……でもおいちゃん。おいちゃんも見たよね？ ぴくぴく、つて動いたように見えたよ——内臓が」
「そうね。ぴくぴく、つて動いたって言つてたのは、内臓のことだったのね……」

茜の真意をようやく理解できて良かった。茜がよくわからないことを言うのはいつものことなのだが、まあもう少しわかるように仔細を説明して欲しいと思わなくもない。

とにかく、幽霊の正体見たり枯れ尾花——とい

うことでいい。

「確かに動いたわね——内臓の部分の陰が」

内臓自体が動いたわけではない。内臓の立体を演出する陰が動いたことで、『内臓が動いた』ように見えただけなのである。おそらく微小な飛行生物、例えば小鳥や羽虫なんかが月光を横切つて遮り、陰に変化を与えた結果、そのように見えたのだろう。

そのことを茜に説明すると、目を輝かせた。

「おおお！ なるほどなるほどね？ さつすが科学部部长——！」

恐怖を克服した茜。私の腕は解放された。胸の感触を味わえないのは残念だが、また機会はあるだろう。抱きつかれっぱなしでも疲れるし。

「じゃ、次行こうか？」

「うん。行こう！」

そういうわけで、私たちは理科室をあとにした。

去るとき背中に視線を感じたのは、きつと気のせいだ。



ガラガラリと。

続いて来ましたるは音楽室。扉を開ければそこは廊下よりも静謐さを感じる空間であつた。そう感じるの、昼間ならば常に賑やかに何らかの音で満ちている音楽室に対するギャップからだろうか。

「うわっ、こわ！ いつも思うんだけど、なんで音楽家の人って怖い顔してるのかしら？」

「そんなの、自分の威厳に箔をつけるためとかそんなところでしょ。豪勢な髪だつてカツラだつていう話だし」

「へえー！ 見栄っ張りなのねえ！ そしておいちゃんはほんと物知りよねえ！」

「ふつう、写真撮られるときはカッコつけるものでしょ？ それに、自撮りで盛るのなんて今のご時世じゃみーんなやつてるじゃないの」

「あー、確かに！ 言われてみれば、私もめっちゃめっちゃ盛るわ！」

めっちゃめっちゃ盛つても盛らなくても、茜が

可愛いという事実には何の影響もないが、どちらにしても異なる可愛さを提供してくれる。ちなみに盛った茜の自撮り画像は送られてきた瞬間に保存した。

「あれ？ おいちゃん、誰の目が光るんだっけ？」

「ベートーヴェンのはずよ」

「ほんと？」

「嘘言つてどうするのよ」

「えー、いや、ベートーヴェン、いないんだけど？」
「えっ——そんなはずは……」

音楽室にあると噂される怪異は二つ——目の光るベートーヴェンと、ひとりでに鳴るピアノだ。

しかし肖像画群を眺めても——モーツアルト、バッハ、ハイドン、ヘンデル、シューベルト、ショパン、ワーグナー、瀧廉太郎——と、なるほど確かに、ベートーヴェンの姿はなかった。

噂の真贋云々どころか、その存在すら無いとは……。そもそも、なぜベートーヴェンだけ目が光るのか、よくわからない。

無いものは確かめようがない。そういうことで、私たちはもう一つの怪異、ピアノの方に向かった。

いたってふつうのグランドピアノのように見える。ピアノカバーを捲れば、月明かりから照らされた黒光りが目に眩しい。

「……………」

「……なにも起きないね……」

「そうね……………」

幽霊の類いにはあまり詳しくないので想像なのだが、ピアノがひとりでに鳴る場合、少なくとも鍵盤蓋は開け放たれるのではないだろうか？ 鍵盤蓋が閉じられたままピアノの音が聞こえるのはそれは確かに不気味ではあるけれど、光景を思い浮かべると滑稽だ。まあ、『人がいないはずの教室』から音が聞こえるのが怖いのでから光景を思い浮かべる者などまずいないのだろう。

断片的な『存在』が私たちを恐怖させる。中途半端な、不確定で不安定な『存在』が私たちを恐怖させる。これは神や妖怪、怪異妖魔魑魅魍魎の起源である。理由・原因・動機の不可解・未知。これが恐怖を生む。

「ああ、もう！ なにも起きない！」

ちよつとどいて、と茜が私をピアノの側から押

し退け、椅子に座る。そして鍵盤蓋を開け——つてちよつとちよつと^三

「ちよ、なにしてんの^三」

思わず茜の腕を掴んでしまう。細いくせに柔かい。

「なに、つてそんなのピアノを弾くに決まってるじゃん」

「何が決まって——」

何が決まっているもんか、と言いかけて思い出した。茜はピアノを弾くのが大好きなのだ。

「いやー、うずうずしてたんだよねー！ そりや本当にひとりでに鳴り出したら怖かったけどさ、なんにも起こらないんだもん！ いつかい夜の真つ暗闇の教室で楽器弾いてみたかったの！ なんだろ、楽器の音が一層際立つって思わない？」

などと言いながら、手慣れた様子で準備を進め、鍵盤に手を当てた。ポロン……、と綺麗な音が部屋に広がる。滑らかな動きだ。十指がまるでそれぞれ意思を持っていて、それでいて統制が為されている、そんなような。私と同じ人間の手とはとても思えない。いや、違う人間の手の手だった。

心地良い旋律が二分ほど流れたあと、茜は席を立ち、一礼した。ぱちぱちぱち、と拍手をする私。そうせざるを得なかった。

「はあ。すつきりしたっ！」

「凄いわね本当……。いまの、なんて曲？」

「えー？ いや即興だから曲名とかないよ？」

「は……即興……？」

「うんうん。どう？ 我ながら良い出来だと思っただよね」

「いや、良いも何も……」

私をして無意識に拍手せしめるとは、さぞや名のある名曲なのだろう。そんな風に思っていたのだ。

「え？ 何も？」

「最高だったよ」

私の賞賛を聞き、茜はにわかに顔を赤らめる。

「あははっ……。そっか、よかった……」

手足を恥ずかしそうにもじもじさせてうつむく茜。可愛らしさまで最高になっていた。

「そ、それはそれとして！ 結局音楽室はなんにもなかったね」

「理科室も似たようなもんだけどね」

演奏に感動していて気づかなかったが、先ほどまでの状況、事情を知らない第三者から見たらまさに『人のいないはずの部屋からピアノの音が鳴り響く』というものだったのではないだろうか？ ……触れないでおこう……。ひよっとしたら、私たちのような闖入者の物好きが、ただ夜の音楽室で独奏を演じていただけなのかもしれない。火のないところに煙は立たないもの。

茜のまた違う一面が見られたので良しとしよう。

「さあ、じゃあ、次行こうか——」

と茜の手を引いたのだが、茜は動かなかった。

「お、おいちゃん……」

「ど、どうしたの？ まだ弾き足りない？」

「いや、そうじゃなくて、ベートーヴェン……」

ベートーヴェン？

「ベートーヴェン……」

急いで茜の視線の先を追う。

追った先には、ベートーヴェンの肖像画が——

目を光らせて、存在していた。

そういえば、と今更ながらに思い出す。

音楽室の内装は音楽科担当教員に一任されている。その教員は、大のベートーヴェン好きなのだ——狂信とも言えるほどに。ならば、あの肖像画の列にベートーヴェンがいなかったのは頷ける。ベートーヴェンの肖像画は特別に待遇され、壁際ほどほどにあるピアノの真上に設置されていたのだ。

ベートーヴェンのみに噂が立ったのは当然とも言えた。

茜をちらりと見遣る。固まって身動きができないようだ。それにしてもかわいいと再認識する。

そしてもう一度輝く目を見るとどこか違和感を覚えた。そこで私は茜から手を離し、ベートーヴェンの肖像画の真下に近づこうと試みる。ベートーヴェンの輝く目を真下から見上げたとき、その正体は容易く分かった。

「ははん……なんだ、そういうことか」

ピアノの向こう側にいる茜にサムズアップして「大丈夫よ！」と告げる。ピアノ越しの茜の顔は

涙に濡れているように見えた。可愛いなあ。茜を安心させるためにも早くしなければ。

私は、壁を叩いた。力の強さはさほど問題ではなく、衝撃が肖像画——『目』に辿り着けばそれでよかった。

すると、肖像画からカナブンほどの甲虫が飛び立っていった。

ベートーヴェンの光る目は、その位置に留まる甲虫の背中が月光を反射してできたものだったのだ。

……なんというか、当然と言えば当然だけど、しようもないものばかりだ。

居所を失った甲虫は、月光の最中、薄暗い空中を飛び回り——最終的に、茜の頭にとまった。

瞬間。

「——っうわあああああつ！ やだーっ！ 取って！ 取って！」

茜が大声で喚き立てる。ただ動いているのは口だけで、他の部分は微動だにしていな。涙目。なんにも大丈夫ではなかった。

茜は大の虫嫌いだったのだ。

「ううー……。お嫁にいけないよ……」

すっかり傷心の茜。移り気な気分屋でも、かのダメーじは絶大だったようだ。私が虫に触れることをなんとも思わない人間だったから良かったが、そうではなかったらと思うとぞつとする。患部をよしよし撫でてやる。私の腕の中にいる茜はまるで泣き疲れた赤ん坊だった。

「大丈夫。なにがあっても私が茜をお嫁に貰うから」

「ほんと？ 約束だよ？」

「もちろん」

この程度の冗談が交わせるなら、ある程度は回復しただろうか。無論、私はこれが日本にいる以上冗談でしかなくなってしまふのが腹立たしくはあるがそれはまた別の話だ。茜のコンディションが心配だ。

「ねえ、今日はもうこんなのやめて帰る？ もしかしたら、万が一にも、『本物』が現れるかもしれないし、お化け相手に精神的に疲弊してる状態は

危険なんじゃないかな……」

柄にもなく非科学的なことを言つてのける。非科学的な噂を利用して茜をおびき出しているのだから、その雰囲気に合わせてるのは当たり前に必要なことだが、普段考えないようなことをすらすらと言えてしまふのもなんだか身体がこそばゆい。

「いや……。大丈夫……。それより、七不思議が本当だったら学校が大変だし……」

「……まあ、そうね」

全くそうではないが、本人が大丈夫という以上拒みようがない。しかし私たち二人は少し変な部分を除けばなんの変哲もない人間だ。霊媒の技能も能力もない。七不思議が本当だったら、真っ先に危険なのは私たちなのだけれど、茜はそこへんを認識しているのだろうか。

本当であるはずも、ないのだが。



結局のところ。

上りと下りで段数が変わる階段は、何度上り下

りして段数を数えても不動の十二段であった。開かずの扉は、開かない以上何もすることができなかった。呪われた本は、どれがそれなのかという情報を持たずに図書室に特攻を仕掛けたために探し出すのを諦めてしまった。

そんなわけで、最後の不思議である。

今までの不思議は有り体に言えば不発弾のようなものだったため、茜は最後こそは意気込んでいる。最初の恐怖はどこへやら。

そうしてやって来ましたが、一階の女子トイレ。

この女子トイレに件の『鏡』がある。

「うわ、さすがに暗いね……」

時計を見ると、一時を回っていた。もう四時間弱は校内にいることになる。

トイレというのは、入り口からでは中を見通せないようになっていいる構造上、細長い形をしていることが多い。外からの光が——月明かりが差し込みにくいのだ。入り口付近であるからまだ多少は明るい、中に入ってしまったら視界を保てるかどうかは怪しい。

「光源が必要かもね」

「おつ、じゃあ私がケータイのライトで照らすよ！」

茜はそう言い、スカートのポケットから携帯電話を取り出して背面のライトをつける。

「……とかそれ、最初から使えば良かったんじゃない？」

「あはは、忘れてたよね」

「怖がってた割に、肝が座ってるのね本当」

「いやいや、怖がって冷静な判断に欠けてたから忘れてたんだよ」

「ま……、なんでもいいわ。行きましようか」

「ぶー、信じてないでしょおいちゃん」

私は茜の手を引き、茜は私の腕を抱き締める。

この柔らかなさは何度味わっても心地良い。眼前の景色は茜のスマホが照らしてくれる。今までの暗さに目が慣れていたので多少眩しすぎるころはあるが良いナビゲートだ。

だがそれも束の間。内部に侵入してすぐ、眩い光が私たちを出迎えた。反射光だ。

私達が、私達を出迎えた。

私達は、私達に瓜二つで、私達と寸分違わず同

じ挙動をしていた。

「これだよね……」

「うん、一階職員室すぐ横の女子トイレの洗面台。いまここにあるこの鏡が、『その鏡』ね」

今のところ、鏡に異常なところは見受けられない。私が口を動かせば、鏡の中の私も同じように口を動かす。鏡の中の茜も、依然として鏡の中の私の左腕に巻き付いていた。怪異と思われる物から目を離さずに茜を見られるというのは素晴らしい。もう少し辺りが明るければ文句はないのだが。

「鏡ね……」言いながら、茜がすいすいと洗面台の方へと近づく。「これ、鏡だって分らなかったら相当怖いよね」

「どういう意味？」

「いやだってさ。いま目の前に見える私たちが『鏡の世界の私たち』だって、私たちは理解しているから怖くもなんともないけど、そうじゃなかったらドッペルゲンガーじゃないの。瓜二つの容姿の人間が同じタイミングで同じことを言つて同じことをしてるんだよ？ これ自体怖いよねえ」

なるほど——と、思う。『鏡の世界』はあくまで

私たちの世界の裏返し。そう理解しているからこそ、『鏡の世界が裏返しではない状況』や『裏返しの世界が鏡の世界ではない状況』はなるほど確かに、恐怖の対象だ。

今でこそ科学が発達し、『鏡の世界』は電磁波——特に可視光——の物理的反射によつて生まれる虚像の産物だとわかつている。しかしそれまでは不可解で神秘的な呪具として扱われたことも多い古代などでは呪術や魔術に引っぱりだこであったらしい。影見——それが鏡の語源だ。『鏡の世界』はこの世の影。いつの時代も神秘主義の対象としてされてきた。現代でさえも。

要するに、予想に反した現象が起こると怖い。そういうことなのだろう。

「でも、不思議よね」

「何が？」

「私が右手を上げたら、鏡の中の私は左手を上げる。これつてすつごく不思議じゃない？ 鏡の中では常に私たちとは違う行動が為される、とも考えられるんじゃないかしら」

「ああ……。その話なら、ちゃんとした説明を用

意できるわ」

「本当——聞かせて聞かせて！」

振り向いた茜の目は、鏡越しで見た疑念を抱いた物とは変わって爛々と輝いていた。可愛い。

「そうね、鏡の中では右が左になる——そう思う？」

「うん」

「でも実はそうじゃないのよ」

「えー？ どういうこと？」

「例えば、鏡の前で寝っ転がるのを想像してみて——あ、いや、いま寝っ転がらないでよ。汚いんだから」

「わかってるよ！」

「そしたら、鏡の中のあなたは頭と足を逆にして寝っ転がっているかしら？」

「ううん、そんなことない。むしろそんなことが起こったらまさしく不思議な鏡だわ！」

「そうよね——つまり、鏡が反転させているのは左右ではないの。鏡が反転させているのは——反転させている軸は、あくまで鏡の面に垂直な軸。だから私たちの前に鏡があったとき、反転してい

るのは左右ではなくて、前後なのよ」

「確かに——確かに！ なんだか当たり前すぎて見逃してたけど、私が鏡の中の私を見ると、鏡の中の私は私を見てる！」

「そう、前後が反転しているから、そうなるのよね」

「でも、じゃあなんで左右が反転してるって感じるんだろ？」

「それにも理由があるわ。なぜならば、私たちは左右対称な生き物だからよ。上下は頭がある方、重力がある方で定義される。前後は顔がある方、背中がある方で定義される。でも左右っていうのは、私たち人間が左右の区別を持たないために、上下・前後に対して『こちら側が右』『あちら側が左』という風に決めた——だからこそ、上下前後のどちらかが反転すると左右が反転したように錯覚するのね」

「ほお、なるほどね！ 寝っ転がったら『上下が左右になる』から、反対に寝たりしないってことか！」

科学好きの血が騒いで長々と話してしまつたが、

茜は納得した様子で鏡に向き直った。鏡越しの茜の表情は笑顔だ。満面の笑顔。スナップを切りたいくらいだ。

鏡の中の茜は再び、懐中電灯を持った左手を大きく掲げている。つまり茜は懐中電灯を持った右手を挙げていて——ってあれ？

——懐中電灯？

ゾクリ。と。

背筋に悪寒が走った。

よく見てみなければ。大事なことだ。

こちらの茜は、確かに、確かに、右手のスマホをライト代わりにしている——のに、鏡の中の茜が左手に持っているのは——懐中電灯なのだ。

些細な違いであれど、些細な違いなればこそ。理解できずに。

怖い。

私は気づくと、茜の左腕を掴んで走り出していた。

一刻も早く、ここから逃げなければ。その思いに取り憑かれていた。

「ねえ！ ちょっとおいちゃん！ 急にどうしたの？」

茜の声も意に介せない。茜はまだ気づいていない。ならばまだ運が良かった。

純粹無垢たる茜を怪異の食指に晒さずに済んだだけでも僥倖というものだった。

どれくらい、走っただろうか。まだ走っている。

とつくに校門を抜け、茜の腕をしつかりと掴みながら街中を疾走している。

いやしかし——ようやく回復してきた意識が認識する。この景色は、この街並みは——どうやら私は、茜の家に向かっているらしい。無意識のうちではあるが、茜を安全なところまで送り届けたかったのだろう……。

朦朧とする意識の中で思う。私は二度と、一階の女子トイレは使用しない。茜にも利用させない。危険だ。トイレは他の階にもたくさんあるのだ。なんの問題もない。

大丈夫——大丈夫だ。

「おい——ちゃん、ねえ、はあ、はあ、疲れたよ、もう走らなくても、よくない？」

随分遠くから茜の声が聞こえる。すぐそばにいるはずなのに。

なんだかぼんやりとしている。

「いてっ」

そんな声が聞こえたかと思うと、右腕に感じていた重みが消えた。

それでもそのまま少しだけ走り続けた後、私はハッと意識を鋭くした。

重みが消えた。私が右手に掴んでいるはずのもの——掴んでいるはずの誰かがいない。

茜、茜がきつと、転んだのだ。

茜——！

「——『茜』っ！」

そう名前を呼んで振り返った。

振り返ったのだが。

その視界の先には、ただ懐中電灯が——あの『鏡

の中の』懐中電灯が転がっているだけだった。

「え……、え？」

混乱。混乱していた。端的に言って私は混乱していた。今までずつとそばにいたはずの茜が消えてしまっていた。どこか見えない場所に隠れているわけでもなさそうだ。視界にはずつと塀が続いていて、その高さは茜が容易に越せるようなものではないとわかる。

街灯がパチパチと明滅している。心臓がドクドクと早鐘を打っている。

二つがシンクロしているように思えて私は——

「あれ、おいちゃん！ どうしたの？」

後ろから、いや、上の方から人の声が聞こえた。

茜。茜の声だ。

振り向くとそこは、茜の家だった。茜は二階の窓から顔を覗かせてこちらに手を振っている。

そうか——と私は胸を撫で下ろした。

私が意識を朦朧とさせている間に、茜は私を追い越して、先に家に入っていたのだ——だっ

たらそうと早く言ってくればいいのに。

はあはあ、と、まだ息が落ち着かない。

私のただならぬ様子を察したのか、茜は「そっち行くからちよつと待ってて！」と言って顔を引っ込めたかと思うと、戸から出てきてくれた。天使か。

「茜——茜！」

「はいはい。おいちちゃんのアイドル茜ちゃんですよー。なにどうしたの？ そんな鬼みたいな顔して。怖いよ？」

そう言つてクスクス笑う茜。

ああ良かった、茜は健在だ。

「というかごめんね」

突然謝り出す茜。ああ、黙って先に家に帰っていたことを謝っているのかな？ 別にそんなこと気にしなくていいのに。現にこうして会いに戻ってきてくれたのだから。

「いやさつきね、急に名を口にするのも憚られる例の♀が大量発生しちゃってさ。その対処を家族総出でやってたわけ。まあ私は虫が超超超苦手だ

から、逃げ回つてただけなんだけど……。そんなわけで、今日の学校散策ドタキャンしちゃったの。せっかく誘ってくれたのにごめんね！ほんと、今度なんか奢るから！」

「え？」

え？

「茜……」

「ん？」

「今日、学校には来なかった？」

「え、うん。そうだよ。夏休みなんだし、用事がないや行かないよ。誘ってもらったのにブツチしちゃって申し訳ないんだけど、緊急事態だったから。メッセージ、送ったでしょ？」

私は急いで携帯電話を取り出し、確認する。ドタキャンを告げるメッセージがSMSの記録に残っていた。送信時刻は九時二十二分。

「ちよ、ちよつと待ってよ……。じゃあさつきまでいたのは……」

頭の中が混沌に犯されている。

混乱、混濁、混沌。

どうしようもなくグルーミーな。

……いま思い返して——ハツとなる。

今夜ともに夜の学校を探検し、その苦楽を体験したその人。

あんな会話やこんなやり取り。愛らしいその肢体、仕種、言動は、彼女のものではなかったのだ。

そんなはずがあるわけもない。

なぜならば、私の今夜の記憶の中にある彼女に顔なんてなくて。

闇より深い深淵に塗り潰されたような黒い孔が、ぽっかりと空いているだけだったのだから。

タナカ

大砂漠。大陸の東西に広がる、この帯状の砂漠が、人々の障壁となっていたのも、遙か昔の話だ。大砂漠を縦貫する谷が、発見されたのだ。

谷の底なら、吹き付ける熱砂も関係ない。水の入手も容易だ。人々は谷を削った。幅を広げ、底を均し、街道としたのだ。ルルグー大回廊である。ルルグー大回廊の丁度、中間点に、岩と砂の都、アッサリアは在った。

アッサリアの往来の片隅、角の崩れた岩を腰掛代わりにして、アガサは座っていた。少し高台に有るここからは、谷底の道が良く見えた。

谷底の道といつても、馬車が数十台、横並びに進める幅が有る。道の両脇では、商店が軒を連ねていた。その色の多彩さは、ここが砂漠の真中であることを忘れさせる。

ふと、商人風の男が、アガサの前で足を止めた。アガサを見て、すこし戸惑い、それから声をかけ

た。

「あんた、もしかして、歌姫だろ？」

アガサは黙っている。

「髪の色を見れば分かるさ」

目深に被った頭巾の隙間から、象牙色の髪が一房、いつのまにか零れていた。アガサが、慌てて髪をしまう。

「大丈夫。取って食うつもりはないさ」

商人が、口を開けて笑う。

「どうだろう？ 一曲、歌って聞かせてくれよ。歌姫の歌は、それは素晴らしいものだって言うじゃないか」

アガサは、首を横に振った。

「いいじゃないか。減るものでもないだろう？」

アガサは、首を振る。

「歌姫の歌を、一度でいいから聴いてみたいんだ。なあ、頼むよ。少しでいいんだ」

「……」

「金か？」

「……」

「何だよ。さっきから黙り込んで」

「……」

「じゃあ、一言でいい。一言、こんにちは、つてさ。挨拶だろ？」

それでもアガサは、俯いたままだった。

「俺らみたいな、薄汚れた商人には、声だつて聴かせるのも惜しいのか？ 金持ちの前だったら、いくらでも口を開くんだろうに」

商人は忌々しそうに言った。そして、足を前に突き出す。靴の裏が、アガサの座る岩を、叩いた。

「……」

商人はそのまま去って行った。アガサは彼の背中を目で追いながら、頭巾を被り直す。

やがて、商人は人ごみに紛れ、見えなくなつた。髪は、もうはみ出していない。

「アガサ。お待たせ」

今度は、少年がやって来た。両方の手に、パンを待っている。その片方を、アガサに差し出す。

「なんか有つたの？」

アガサは首を横に振る。

「そう。なら良いけど。……早く食べなよ。温かい方が美味しいから」

少年がパンに嚙り付く。白くずっしりとした。パンを食い破ると、中から甘辛く煮た肉と野菜が溢れ出す。

「これ、美味しいよなあ。大回廊の外でも、売ればいいのにね」

この大きなパン、一度に肉も野菜も摂れる。そして、歩きながらでも、馬車の上でも、食べることでできた。時間に追われる行商人だらけのこの回廊で、大いに流行っていた。

アガサが、少年の足を蹴る。半分ほどに減つたパンを少年に突き出す。

「お腹いっぱい？ もう。しょうがないなあ。ボクが食べるよ」

少年は、パンを受け取ると、もう半分も楽々、胃袋に収めた。

アガサが少年を蹴る。

「今度は何さ？」

蹴り、蹴り。

「……ん、何？ もしかして、飽きたの？」

アガサが頷く。もしかしくなくても、飽きていた。「でも、これ美味しいのに。……分かった。」

晩ご飯は別のにするから、蹴るのを止めよう」

ルグー回廊に足を踏み入れたその日、少年はこのパンに出会った。それ以来、少年はこのパンの虜だった。お昼ごはんを買いに行かせれば、迷うことなく、この具入りの白パンを買ってくる。

疲れていたけど私も一緒に行けば良かった、とアガサは思う。

アガサは少年の方を向いて、手をチャカチャカと動かす。

（これから どうする？）

アガサの手の位置、指や肘の曲がり具合、その全てに意味が有った。少年には、それで伝わる。

「まだ行つてない鍛冶屋もあるよね」

（回る？）

「うん。回る。……ボクだつて嫌だよ」

二人は、頭上を見上げる。谷には、幾つも、岩でできた橋が架けられていた。段違い、筋違いに架けられた橋は、まるで蜘蛛の巣のようである。

いや。蜘蛛の巣は平面だが、アッサリアの橋は立体的なので、より複雑だった。そして、それらの橋にも、太さに応じて、住居や商店、工房が詰

まっている。

「この辺、もともとは洞窟だったらしいよ」

アガサは無言で先を促す。

「あの橋は、架けられたんじゃないくて、削り残しなんだってね。人が通りやすいように、百年かけて洞窟を削ったらしいんだけど、ああいふ橋みたいにして、天上の部分を少し残したんだって」

（どうして？）

「土地が足りないから。後は、日よけのためかな。狭い谷底で、工夫してるよ」

（私 たちは 疲れる）

「風情が有るじゃん。疲れるなら、おんぶしようか？」

アガサは首を振る。

「なんで？」

（恥ずかしい）

「へえー」

少年が、にやりと笑う。

「アガサにも恥ずかしいとか有るんだ。へえー。意外だなー。気にしないで良いのに」

アガサの、こういう反応は、少年にとって新鮮

だった。旅を始めてから、初めてかも知れない。

「ん？ その指の形、なんて意味だっけ」
目潰し。

「ぎよえええええ！」

少年が目を抑えながらのたうち回る。

「……こ、このボクに目つぶしを当てるとは、やるじゃないか。歌姫、辞めちやええ？ 暗殺者とかどう？ ボク、教えるけど？」

アガサが、少年の膝の裏を蹴る。早く行こう、という意味だ。容赦が無い。

「アガサ。こっち、こっち」

一人で勝手に歩き出したアガサを、少年が正しい方向に導く。

向かう先にも、橋が有る。少年たちは、まだ橋の上は回っていなかった。

「それにしても、凄い人だね」

（砂漠の 中じゃ ない みたい）

「ほんと、ほんと」

人ごみもそうだが、その種類も多様だった。肌の黒い者、黄色い者、白い者。格好も商人風に交じって、武器を背負った者や、巡礼のような者と、

様々である。行き交う人の流れには、実にたくさんの人種が入り乱れている。

少年はふと、こんな事を思う。この人ごみの中で、自分たちはどう見えるのだろうか、と。

アガサは、砂と同じ色の外套を着込んで、頭巾まで被っている。身体の線を隠しても、華奢な事が簡単に分かる。

一方、少年はこの辺の住人たちと変わらない格好をしていた。白っぽい生地で、身体を締め付けない服だ。おへそが出ている。一応、腰と背中に短剣を括ってあった。

巡礼中のお嬢様と、護衛というのが妥当だろうか。

「あとは、恋人とか？」

アガサと少年の間の距離が、若干、遠くなる。

「ごめん、ごめん。そんな警戒した目で見ないでよ」

やがて、アガサたちは、工房が立ち並ぶ橋に辿り着いた。下を見ると、先ほどの大通りが、橋と橋の隙間から見えた。

「さてと。それじゃ、この辺りから始めますかね」

アガサが頷く。頷いて、一步下がる。アガサにとつて、人と接するのは何かと面倒なのだ。

「ごめんくださいーい」

少年が工房の前で声を張る。すると、おそらく見習いであろう小僧さんが出て来た。

「あいよ！ 何をお求めで？」

「この工房で、刃物は扱っていますかね？」

「金物なら、なんでもございます！ どんな刃物で？」

「こんな短剣なんですけど」

少年が、懷から取り出す。小さな、手の平に収まる、短剣だ。

「これは、打ち合うんじゃない、投げるためのものですねえ」

見習い職人は、そう言つて、鞘から短剣を抜く。

刃の輝きは、一分の隙も無い。

「綺麗だ……」

見習いの目線が、刃に吸い付けられていた。意識までも、刃の中に吸い込まれそうな勢いだ。そろそろと、見習いの指先が動く。彼は、刃を撫でようとしていた。自分の意志とは関係ない。剣の

魔力がそうさせるのだ。

「そこまで！」

少年が、見習い職人の手から、短剣を奪い去る。

見習いが、手の中を見る。そこに短剣は無かつた。

「お願いだ！ も、もう少し！ もう少し、見せてくれよ」

「はいはい。ちょっと待つてねー」

少年は、柄の尻を摘み、見習いの目の高さまで、短剣を持ち上げた。

「綺麗だ……」

「はい」

ぱつ、と少年が指を離す。短剣は、刃を下に向けたままで落ちて行く。やがて、切っ先が地面に触れた。そこで短剣は止まらない。地面に、するすると沈んでいくのだ。まるで抵抗など感じさせない。

そして、握りの部分まで地面に埋まると、ようやく短剣は止まった。

「え？ え？」

小僧さんが、地面を。ぺたと触る。短剣は、

沼にでも沈むかのように、地面に突き刺さった。しかし、何度触つてみても、地面は砂漠の乾いた岩だ。

少年が短剣を引き抜く。地面には、ちょうど刃の形の穴が開いていた。短剣の刺さった跡である。

「こんな短剣、造れますか？」

「む、無理だ！ 無理に決まっている！ こんなの、有りえない！」

「銀貨五百枚、払います。もちろん、この辺で流通しているやつで」

「どれだけ大金積まれたって、こんなのは造れないよ」

見習いの騒ぎ声に、奥から親方も出てきた。彼の反応も、似たようなものだった。アガサと少年は、お礼を言つて、立ち去った。

（飽きた）

「ボクも」

アガサと少年は、もう何度も、このやり取りを繰り返していた。短剣を見せて、驚かれる。その大げさな驚きっぷりに、いい加減、食傷気味だったのだ。

（帰つていい？）

「どこにさ？ だいたい、歌姫様が居ないと、どうしようも無いじゃん」

（知つてる 訊いた だけ）

少年とアガサは、その後、似たようなやり取りを、数十回、繰り返すのだった。

（飽きた 飽きた 飽きた）

「もう半分だから」

（まだ 半分 なの ？）

アッサリアは、交易の街であると同時に、鍛冶の街なのだ。質の良い鉱石や石炭が出る事、そして、周りが砂漠なので、毒水や鉱石屑の処分に困らない。おかげで、大小様々な工房がひしめき合っていた。

その時だ。悲鳴のようなものが聞こえた。市場の喧騒とは、明らかに違う。

（なに ？）

「分からない。……ねえ、アガサ。心なしか、君が嬉しそうに見えるんだけど？」

（そんな こと ない）

嘘だった。このお姫様は、刺激を求めてらっし

やる。

（あっち）

「いや、行かないって。変なことに巻き込まれたら嫌だし」

（魔法が 関係ある かも）

「いや、まあ……そうかも」

無いとも言切れないので、少年は困る。

「関係無かったから、引き返すからね？」

アガサが頷いた。騒ぎ声のした方へ、少年は、アガサの手を引く。

「……この辺だな」

（何も 無い）

「下だね」

見れば、斜め下の橋で、砂糖に群がるアリのように、人が群れていた。高さが有るので、本当にアリのように見える。

「……乱闘みたいだね」

少年は眼を細めながら呟いた。

（止めて）

「え、あれを？」

アガサが頷く。

「あれは魔法、関係無いでしょ。ただのケンカみたいだし」

（ごめん 正直に 言う）

「うん？」

（飽きたの 鍛冶屋を 回る のに も 岩と砂 しかない 風景 に も）

「ボクは、君の道化師じゃないんだけどね……」

しかし、実際、少年も退屈していた。アガサの言葉には共感できた。というより、少年の本心そのものだ。

「でもなあ……」

こくこく、とアガサが頷く。

「どうしたの？」

（たぶん 大丈夫）

「大丈夫って、何が？」

アガサが、チャカチャカと手を動かす。

「その手の形、なんて意味だっけ？」

押した。

「え？」

よろよろと、少年が後退る。

「……あれ？ 浮いてる？ 浮いてるの？ 嘘で

しよおおお!!」

一步踏み出すと、そこは、もう地面では無かった。

「騙されたなあ……」

少年の身体が、傾いていく。もう、止まらない。

そんな少年を、アガサはじっと見ていた。二人の目が合う。アガサは、「あー、落ちてるなあ」という無感動な表情をしていた。

「少しは驚いてよ……」

この横暴な、しかし予想外なアガサの振る舞いを、楽しんでゐる自分もいることに、少年は気づく。少年自身も、それが不思議だった。

「でも、流石に、今回は少し怒らないと」

そんな事を呟きながら、少年は落ちて行つた。埃っぽい、砂の交じつた空気が、身体にぶつかる。

網の目のように張り巡らされた橋が、上に流れていく。

身体を捻る。着地。まずは、つま先から。このまま勢いに任せると、足が潰れるので、少年は身体を横に倒す。膝、腰、わき腹、と地面につけながら、真横に転がる。下向きの勢いを、横向きに

変えるのだ。後は転がつて、勢いを殺す。

ふう、と少年は息を吐いた。

このくらいで死んでいたら、歌姫の守り手は務まらない。アガサも、それを分かっている。やっている。

少年は身を起こす。すると、目の前に、靴の裏が迫っていた。慌てて身体を捻る。

少年は忘れていた。彼の落下点は、乱闘の真ただ中だった。怒り狂う群衆が、揉み合い、押し合い、蹴りと拳が乱れ飛ぶ。

少年は喧嘩の嵐の中を、頭を抱えて逃げた。やじ馬が人垣を作っている。仕方ないので、彼らの股下を潜る。非常に屈辱的だった。

「……おまたせ。今回のは、ちよつと酷いよね？」少年は歩いて、元いた橋に戻つた。

「あの、どちらさまでしょうか？」

「あれ？ あ、いや、ごめんなさい。人違いでした」

アガサだと思つて声をかけてみたら。別人だったのだ。頭巾を着込み、似た背格好だったので、間違えてしまった。

別れたのは、確かにこの辺だったはずだ。しかし、アガサが居ない。

「守り手様！」

背後から声がした。振り向いてみれば、屈強な男が、少年に向かって手を振っている。腰に佩いた剣から、アッサリア騎士団の者だと判断する。

そして、その屈強な男の陰に、アガサが居た。

アガサが指をチャカチャカと動かす。おかえり、と言いたかったのだろう。しかし、指の動きは不完全だった。何故なら、氷砂糖を持っていたから。手の平からはみ出るほど巨大な、砂糖の塊だ。様々な果物も、砂糖と一緒に固めたいらしい。氷砂糖の中に、色鮮やかな果物が浮いている。逸品である。

「そんな高価なもの、どこで？」

隣の騎士を指さす。

「申し訳ございません。お腹をお空かせていらしたようなので、私が差し上げました」

「ボクの活躍は？」

アガサは首を横に振った。氷砂糖の中から、キイチゴをほじくりだして、指で弾く。少年は、飛んできたキイチゴを、口で受け止めた。キイチゴ

は甘くて美味しかった。

「騎士さん。こんな高価なものやらないで良いですよ。どうせ味、分らないですし。甘ければ何でも良いんですよ」

アガサが少年の脛を蹴る。

「分かったよ、アガサ。……いい加減、ボクも疲れた。今日はそろそろ、お終いにしようか」

アガサの顔がパアツと輝く。

2

アッサリアの街の、東側の入り口に、その塔は立っていた。アッサリア騎士団東駐屯所である。

砂漠の夕焼けは赤い。塔の先端だけ、朱色に塗ったようだった。

「よろしければ、当駐屯所を、宿にお使いください」

街角で出会った騎士は、そう申し出た。タダらしいので、少年は厚意に甘えることにした。

少年たちは、塔の最上階へ通された。そこでは禿頭の大男が、騎士たちに、何やら命令を飛ばし

ている。その極太の二の腕は、茶褐色の肌と相まって、丸太のようだった。アガサの胴体と同じくらい太さだ。

「すみません」

物々しい雰囲気も気にせず、少年が大男の話を遮る。一瞬、辺りが静まり返った。慌てて、案内の騎士が、禿頭の大男に、耳打ちした。大男が、すぐさま最敬礼の姿勢をとる。遅れて、周りの騎士も、それに倣う。

「お待ちしておりました。歌姫様。守り手殿。遠路はるばる、お疲れ様です」

アガサが頷く。

「今、伝えたことだけを、やっておいてくれ。後は副団長に任せる。以上！」

端騎士たちは、足並みそろえて部屋を出ていった。少年とアガサ、そして大男が部屋に残される。

「慌ただしくて、申し訳ございません。私、このアッサリア騎士団を預かります、ギョーム・アデイブルと申します。以後、お見知りおきを」

「歌姫のアガサと、その守り手の者です。話の腰を折ってしまい、すみませんでしたね」

「問題ございません。アッサリアには、しばらくご滞在なさるのですか？」

「ええ」

「その間は、どうぞ我が駐屯所をお使いください。幸い、将校用の部屋に、空きがございます」

「助かります」

数分後、ふかふかの寝台に飛び込む、アガサの姿が有った。

（一生 寝台 から 出ない）

体を寝台に沈み込ませたまま、腕だけ上げてアガサが言う。

「分かったよ。明日は、残りの鍛冶屋さん、市場を巡るからよろしくね」

枕が飛んでくる。少年は、それを捕まえながら言う。

「あ、これ、めちやくちや柔らかいな」

備え付けの卓には、瑠璃の水差しと、果物が盛られた籠が置かれていた。景観も良い。砂漠の街が、赤い夕焼けに沈んでいる。市場は、まだまだ活気があった。これから、夕餉時だった。

「タダで泊まるのが申し訳ないよね」

少年が寝台をのぞき込むと、アガサが幸せそうな顔をして、転がつていた。象牙色の髪が乱れて、風に吹かれた後のように、白いシャツに広がっている。

「アガサ。明日、団長さんに会ったら、お礼言つてよ」

（私 喋れ ない から 無理 無理 ）
足をばたつかせながら、アガサが言う。

「都合良いな。頭ぐらい、下になって……」

（覚えて いたら ）

指の動きが、投げやりだった。少年は最近、指の動きかたで、アガサの機嫌が分かるようになっていた。

「あと、アガサ。騎士さんと二人でいたじゃん？」

ああいうの、ダメだよ」

（お菓子 もらった から ）

「お菓子は別に良いんだけどさ。アガサが喋れない事、バレちゃうでしょ？」

（ごめん ）

「怒ってはいけどき。気を付けないと……」

アガサは歌姫だが、魔法が使えない。声が出せ

ないから。つまり、彼女は、普通の少女と変わらない。

気づけば、すーすーと寝息が聞こえて来る。アガサが眠りに落ちていた。

少年はしばらく、その音に聞き入っていた。胸が、微かに、規則的に上下している。アガサの寝姿は、彫像のように美しい。このまま、王宮の宝物庫に、安置できそうなほどだ（寝相が若干、前衛的すぎるが）。

最も目を引くのは、髪だ。その象牙色の髪は、本当に象牙を引き絞ったように、滑らかで、艶やかだ。

少年は思わず、その一房を摘まむ。

はっ、とする。

アガサの髪は、ガラスのような肌触りだった。

少年は、ヨクボウに抗うことができなかった。摘んだ髪の毛先を、鼻先に近づける。その時、アガサと目が合った。

（何を しているの？）

その夜、アガサの寝台の四隅に、アッサリア騎士が立つことになった。

当然、少年は部屋を追い出された。真つ赤な手形の残る頬を撫でる。ヒリヒリと痛んだ。

「守り手殿。何かお飲み物はいかがでしょう？」

「いえいえ。お氣になさらずに」

少年はギョームの執務室に居た。来客用の革張り椅子に座る。その背後、部屋の隅で、ギョームが控えている。半ば、給仕のような態度の団長だが、腰には真剣を佩いていた。彼の背後の壁にも、抜き身の槍が掛けてある。装飾兼、実務用だ。合理的である。

アガサが、団長に向けて手紙を認めたのだ。曰く、「この不埒ものを見張れ。命に代えても見張れ。不審な動きをしたら、殺しても構わない」

そういう訳で少年は、団長と一夜を共にすることになったのである。

歌姫からの手紙という事で、ギョームは大いに恐れ、慄いていた。アガサは喋れないので、手紙を託したにすぎない。しかし、手紙という格式ばった様式が、団長にさらなる緊張を与えた。

しかも、内容が、内容である。守り手を殺せとは、如何に。団長は歌姫の命令を断るわけにもい

かないので、こうして少年と二人でいる。いざ事が起こればどうすれば良いのか。彼は戦線恐々としていた。

このまま一晚は辛いな、と少年の方から話しかける。

「やっぱり、飲み物をもらつても良いですか？」

「かしこまりました。コーヒーなどございますか？」

「コーヒー？」

「南方のお茶です。貴人などが、好まれるので、守り手殿もお好きかと」

「……では、それを願います」

少年自身、貴人のつもりは無いのだが、厚意は受けておく。運ばれてきたお茶は、香ばしい、良い香りがした。しかし、椀をのぞき込んだ少年の表情が、一瞬曇った。椀の中身が、ドス黒い。

少年は、試しにほんの少しだけ、口に含んでみる。

「不味い！」

と叫びそうになった。それでも堪えたのは、これ以上、空気を悪くしないためだ。苦みを我慢し

て、飲み下す。喉に苦みが絡みついたような気がする。

貴人の舌がバカなのか、自分がバカなのか。

「ギョームさんも一緒にいかがですか？」

「そういうわけには」

「一人で飲んでも、味気無いんですよ」

「そういう事でしたら」

ギョームが、少年の体面に座る。騎士は、何も無いように、コーヒーを飲む。あの苦い液体が美味しいのだろうか。少年は疑問に思う。もし少年に氣を遣って、不味いのを堪えているのであれば、余りにも不毛だ。

「ところで、ギョームさん」

「ギョームとお呼びください」

「いえいえ。ギョームさん。アガサの手紙なんですけど、無視してもらって良いですよ。実はですね、ボクが間違つて、アガサの身体を触ってしまったんですよ。それで腹を立てているみたいで」

髪の匂いを嗅いだ、とは言わない。

「大げさなんですよ。あいつ。姫様とか呼ばれてる人種はワガママというか、なんというか……」

とにかく、余り気にせずに。適当にあしらつてもらつて結構ですよ。せっかく、一晚、一緒に過ぐすんですから、仲良くしましょうよ」

少年は笑いながら言つた。すると、ギョームが、恐る恐る口を開いた。

「……質問をしても良いでしょうか？」

「何なりと」

「アッサリアにいらしたのは、やはり、魔法絡みでしょうか？」

さて、なんと答えたものか。少年は取り敢えずコーヒーを啜る。

「魔法——」

少し、間を置く。

「——と言えば、魔法ですかね？」

ギョームの顔に緊張の色が浮かんていた。分かりやすく良いなあ、と少年は思う。この辺はやはり、兵隊さんらしい。

「まあ、アッサリアは、通り道ですよ」

「ではどこへ？」

「それは答えられません」

「失礼、つかまつた」

「いえ」

少年は嘘をついた。少年とアガサは、この街に魔法を探しに来たのだ。

「ボクからも質問です。この街で、歌姫の事を知っているのは何人ですか？　つまり、歌姫が魔法を使えると思っている者は、何人ですか？」

「私を含め、四人です」

「四人……」

歌姫とその守り手は、魔法を求めて世界中を巡る。彼女たちが自由に旅をできるのは、その土地の有力者が後ろ盾となり、便宜を図ってくれるからだ。しかし、その事を知っているのは、ごく一部のものだけだ。王やそれに近い者、有力都市の市長、そしてギョームのように軍隊の長、などである。一般人は、歌姫を旅の芸人か何かだと思っている。

アッサリアも有力都市であるが、この規模にして、四人は多い。

「多いですね」

「ご存知の通り、アッサリアは議会制を採用しておりますゆえ」

「と、言いますと」

「商人、鍛冶師、探鉱者、騎士、それぞれの代表が話し合ってこの街の事を決めるのです。それぞれの長が、歌姫様の事を知っております」

「なるほど……。しかし、代表が複数いると、勝手をしだす連中が出るのでは？」

「それには及びません。例えば、騎士が横暴な振る舞いをする、鍛冶師たちが武器の供給を止めます。鍛冶師が勝手にふるまった時は、商人や探鉱者が原料の供給を止めます。そして、商人や探鉱者が暴れだした場合には、騎士が、彼等を守ることを止めます」

「お互いに、牽制し合っていると」

「そうです」

ギョームがコーヒーを飲み干す。

「アッサリアは砂漠の街です。何か問題が起こった時、逃げ場は有りません。街の皆は、運命を共にしています。ですから、街の有り方は、話し合って決めるのです。代表も、もちろん投票で選ばれます」

「多くの街を見ましたが、先進的な仕組みですね」

「ありがとうございます。ルグルー大回廊という特殊な環境のおかげでしょう」

その後、しばらく、少年とギョームは、互いの持つ情報を交換した。少年は、周辺の国や街の情勢、ギョームはアッサリアの現状や歴史について語った。

翌日、朝早くから、少年とアガサは街を巡っていた。

「アガサ。機嫌、直してよ」

（ どうしようも ない バカ ）

「悪かったって」

（ いつも 同じ こと して いた ？ ）

「違うよ。昨日が初めてだって」

（ 本当 ？ ）

「本当だよ！ ……本当ってことにしときなよ。そっちの方が、心の健康的にも良くない？」

アガサの蹴りが飛ぶ。

（ 最低！ ゴミ！ ゴミ！ 魔法も 見つからない ）

「魔法はボクのせいじゃないって」

少年とアガサは、神懸った切れ味を持つ短剣に

ついて、あちこち尋ねて回った。しかし、結局、見つからなかった。

谷の壁面すぐ近く、ヤシの木陰で、二人は昼食をとることにした。丁度、細長い岩を、腰掛けの代わりにする。近くを、人口の小川が流れていた。

少年が、小川に水筒を沈め、水を汲む。手首から先が、別世界のように冷たい。水は太陽を反射して、きらきらと光っている。

（ どうするの？ ）

「どうしますかね……」

アガサたちは既に、全ての鍛冶屋を回っていた。しかし、短剣の出どころは分からなかった。

（ 考えてよ 人の 髪の毛の 匂い 嗅いで いないで ）

一瞬の衝動に流されるほど、自分の理性は弱かったのか。少年は後悔する。

「街を歩きながら、色々考えたんだ」

（ 例えは？ ）

「はつきり言って、今回の件は不自然なんだ」

（ どうして？ ）

「あんな名刀が出回っているんだよ。普通だった

ら、もつと噂になるはずだけど、誰も知らないんだよ？」

アガサが頷く。

アガサと少年は、ルグルー回廊の十四の宿場町を経て、アッサリアに辿り着いた。その間に出会った魔法の剣は、一本のみ。現在、少年の懐にあるそれだけだ。

その短剣は、アッサリアのすぐ近くの、盗賊が持っていた。それ以外、どの街の市場でも、魔法の剣など、皆、知らない様だった。実際、この短剣を持っていた盗賊も、その価値に気が付いていなかった。盗品の山に埋もれていた。

（どうして 誰も 知らないの？）

「たぶん、隠してる奴がいる。権力者だと思われるけど」

（何で？）

「偉い人は、歌姫の事も、魔法の事も、知ってるでしょ？」

剣は斬るために有る。名刀が有れば、気に食わない人物を斬り殺すなり、貴族に高値で売りつけるなり、有効活用するのが普通だ。しかし、それ

をしないのは、それが魔法であると知っているから。そして、魔法ならば歌姫に回収されてしまう事を知っているからだ。そんな事を知っているのは、一部の権力者のみだ。

「……ちなみに、アッサリアには、偉い人が四人いる」

（多くない？）

「多いね……」

だから少年は困っていた。そして、この四人という数字も絶対ではない。もともと知っていた人物が、自分の周りに漏らしているかもしれないのだ。あくまで、最低で四人、という事だ。

（意外）

「何が？」

（しっかり 考えてた）

「どう？ 少しは見直した」

（うん ヘンタイ だけど 考えてる）

「見直してもヘンタイなのね……」

（それでさ この後は どうするの？）

「そりゃあ、地道に探すしかないね。商人にも、当たってみようか」

（ヘンタイ ヘンタイ ヘンタイ）

やはり、アガサはその案をお気に召さなかったらしい。その日は、まだ日が暮れないうちに、引き揚げた。

（晩ご飯 まで 寝てる）

ヤシのジュースを枕元に置いて、アガサは寝台に寝転がる。今日も、騎士団の駐屯所にお世話になることになった。

「じゃあ、ボクも、ちよつと出かけてくる」

（どこ 行くの？）

「短剣のお手入れ。刃こぼれしてるんだ」

（いつてらつしやい）

少年の答えに、アガサは興味を失ったらしい。

「一人で出歩かないでね。夜は危ないから」

アガサは寝転がったまま膝を曲げ、片足だけ持ち上げた。分かった、という事だろう。

駐屯所を出たところで、少年は風よけを羽織った。少年が向かったのは、鍛冶屋ではなかった。幾筋も掛けられた橋を、上へ、上へ、と登る。やがて谷を抜けて、砂漠に出た。

「暑いな……」

谷底には、すでに夕日は差していなかったが、地上では太陽が、水平線に差し掛かっているところだった。消えかけの陽光だが、ギラギラと肌を刺す。

ふいに、風が吹いた。羽織った風よけの隙間から、細かい砂が入り込む。肌が、ザラザラする。谷底に居ると、忘れそうになるが、やっぱりここは砂漠なのだ。

しかし、そんな砂漠で、怒声を上げながら動き回る集団が有った。アッサリア騎士団である。

少年は目を凝らし、号令をかけているギョームを見つけた。

「どうも。こんばんは」

「これは守り手殿」

一旦休憩、とギョームは声を張り上げる。

「訓練ですか？」

「ええ」

「これで、騎士団全員ですか？」

「ほぼ全員ですね。うちは零細騎士団ですから」

「やはり、砂漠だからですか？」

「はい」

せいぜい、三百程度か。多くの騎士を常駐させる場所も、食料も、アッサリアには無かった。

しかし、騎士たちの動きは、遠目に見ても良かった、と少年は思う。そして、統率もとれていた。頭数こそ少ないものの、弱くはない。並の騎士団が相手なら、倍の人数とも、難なく渡り合うだろう。ルグルー大回廊、大砂漠という地の利を生かせば、それ以上の相手とも戦えるはずだ。

「どうですか？ ボクと手合わせしませんか？」
「そんな、恐れ多い」

「宿を借りているお礼です。この土地では、他流の武術を目にする機会は少ないですよね？ まあ、ボクのは、何流なんだか、自分でも良く分かりませんが」

「そういう事でしたら、ぜひとも」

ギョームは、騎士団の中から、三人を選び出した。その全員が若手なのは、経験を積ませるためだった。

「しかし、本当にまとめて三人？」

「ええ。このくらいで、良い勝負になるはずですよ」
「流石は、守り手殿だ。存分に学ばせて頂きます」

「お手柔らかに」

ギョームが再び、声を張り上げる。

「注目！ こちらは、私の客人にして、剣の名手である！ これより、その技を我々に披露して下さい！ 盗むつもりで観よ！」

薄暮の砂漠で、立ち合いが始まった。

少年は、訓練用の木剣を借り受けた。指先から肘までと同じくらいの刃渡りの剣だ。少年が普段使っている短剣と、だいたい同じだ。おもりが入っているので、持った感触も真剣に近い。

対する、若手騎士三人は、皆、長剣を構えている。肉厚で、彼らの身長ほども有るような、大剣である。もちろん、おもり入りだ。おまけに騎士は、風よけの外套の下に、鎖を編んだ鎧を着込んでいる。ここは砂漠だ。足首まで砂に埋もれる。

そんな状態で、この大剣をいかに扱うのか、少年は興味深くもあった。

「ギョームさん。いつでも良いですよ」

「承知した。……それでは、始めッ！」

少年は、剣を少し下げ気味に、身体の前で構える。

騎士のうち二人が、少年の正面から間合いを詰める。もう一人の騎士が、少し下がって、少年の右側に回り込もうとしている。正面の二人が少年の注意を引き、後ろの一人が強襲する、という算段だろう。

多対一の戦いは、味方にも気を配らなければならない。騎士たちは、良く訓練されているようだった。

正面の騎士の片方が、大剣を振り下ろす。少年は横に逃げる。剣風が肩を撫でた。思ったよりも、近い所を、剣が通り過ぎた。砂に足を捕られたのだ。

続けざま、もう片方の騎士が、剣を振り下ろす。少年が、握った剣を横なぎに振り抜く。大剣の側面を叩いて軌道を逸らそうとするが、威力が足りない。砂のせいで踏ん張りが利かない。

少年は、転がって逃げる、が逃げた先にも大剣が降り下ろされる。

(動きにくい)

正面の二人の騎士は、交互に斬撃を繰り出す。そうすることで、巨大な剣の、隙を補っているの

だ。そして、もう一人が、死角から少年の隙を狙っていた。不意を突く一撃に、少年は何度も、ひやりとした。

砂のせいで、身軽には動けない。これでは、軽い武器と重い武器の、機動力の差は小さくなる。むしろ、身軽さなど気にせず、一か所に留まって、大剣を振り回す戦法は効果的だ。大剣の一撃は重い。

(砂漠の剣か。なるほどね)

足元への突きを、少年は前に跳んで躲す。勢いそのままに、突きを繰り出す。騎士は大剣の幅を盾のように使い、突きをいなす。

別の騎士が、大剣を横なぎに振るう。追撃を諦めて、少年は後ろに下がる。

おまけに、砂漠には障害物が無い。騎士たちは大剣を思うままに振るえる。

いい加減、息が上がってきた。足にまとわりつく砂と、時折吹く強い風が、体力を奪うのだ。しかし、眼前の騎士たちは、まるで呼吸を乱さない。鎧を着込み、大剣を振り回しているのにも関わらず、からくり人形のように、剣を振るい続ける。

(長引くと、不利かな)

少年が仕掛ける。

彼は目前の騎士に突きを放つ、が、全身の筋肉を引き絞り、急制動をかける。騎士達は眼を見張った。疾風のように踏み込む少年が、瞬間、石像のように停止したのだ。

しかし、騎士たちは止まらない。一人は大剣で突きを防ごうとして、もう二人は、少年に、反撃の突きを放とうとしていた。大剣の慣性に引きずられて、そのまま動き続ける。

そんな騎士たちを尻目に、少年は硬直した姿勢から、弾けるように、横なぎを繰り出した。突きから、払いへ、一瞬の変化。騎士たちは、少年の動きを、目で追うしか、できなかった。

影切り。

囀の動きで、敵をかく乱する。

短剣の切っ先が、一人の、騎士の顎下を撫でた。

ここでようやく、騎士たちが反撃に転じる。だが、背後から迫ってくる、突きも、少年は読んでいた。攻撃している時が、最も隙ができる。その隙を、騎士が逃さない事を、少年は読んでいたの

だ。

少年は跳んだ。そのまま、突き出された大剣の上に乗る。間髪入れず、大剣を、思い切り踏み抜いた。少年はさらに、高く飛ぶ。

宙がえり。騎士の頭上を超えて、背後に回り込む。逆さまの世界。頭から、落下しながら、身体を捻る。騎士の後頭部を、短剣で撫でる。

着地。前転することで、勢いを殺す。そこで、少年の眼前に、大剣が突き付けられていた。

結果、少年の負けであった。とはいえ、三対一で戦い、そのうちの二人を仕留めたのだ。取り巻く騎士たちからは、盛大な拍手が送られる。

ありがとうございました、と三人の騎士たちが少年に握手を求める。

「いや、こちらこそ」

少年は、そのごつごつとした、赤銅色の手を握り返す。

「素晴らしい試合でした。しかし、私達には、高度すぎたかもしれません」

そう言っ、ギョームが苦笑いする。

「それは申し訳なかったですね」

「いえいえ。私達の、未熟さのせいですから」

「ところで、この後も、訓練を見学していつでも良いですか？」

「はい。もちろんですとも」

その後、少年は練兵を見学した。練兵は、暗くなってからも続いた。むしろ、日没からが本番だった。僅かな手灯りを頼りに、騎士たちは剣を振るった。

アッサリア騎士団は、総勢、三百人程度だった。少年はその一人、一人の動きを、じつくりと観察した。

3

（守り手を 代える ことは できる ？ ）

「いや、無理でしょ。少なくとも、今すぐは」

アガサが、少年の脛を蹴る。彼女のご立腹の原因は、少年だけが風呂に入ったことだ。

アガサは朝起きるなり、

（ヘンタイ から 良い においが する ）

と少年を問い詰めた。

「だからさ、お風呂は、訓練に参加した人だけしか入れないんだって」

アッサリア騎士団の練兵は、夜遅くまで続いた。死肉を漁る灰色犬の遠吠えが、砂漠に響くなか、騎士達は剣を振り続けた。昼と一転して、砂漠の夜は冷える。水が凍るほどだ。

訓練の後、汚れと疲労を洗い流し、冷えた身体を温めるため、騎士達は風呂に入ることを許される。練兵に同席した少年も、一緒に風呂に入らないか、誘われたのである。もちろん、断る理由は無かった。

（今日は 私も 訓練に 出る ）

「……死ぬから。だいたい、今日は訓練お休みだし」

（ずるい ずるい ずるい ）

蹴り、蹴り、蹴り。

「悪かったって」

まさか砂漠で、風呂に浸かれるとは思っていなかったが、本当に気持ちよかった。自分だけ、良い思いをして、申し訳なく思う。

「でもさ、ボクだって、タダでお風呂に入ったわ

けじゃないんだよ？ 訓練に付き合っただ。

色々、教えてあげたりしたんだ。剣技とか、体捌きとか」

アガサが、少年の手を掴む。そして、手のひらを自分の顔に近づけて、まじまじと見るのだ。

（その 技は 私を 守る ための もの？）

「まあ……そうだね」

（それを 売り物に した 風呂に 入る ため）

視点を変えれば、そういう見方も、できなくはない。

「でもさ、その言い方は、ちよつと……」

アガサが、ハツとした顔をする。

「どうしたの？」

（ヘンタイ だから？ 私の 髪の毛の 匂い お風呂で 落ちない よう？）

「濡れ衣だよ！」

アッサリアに来てから、この調子だよなあ、と少年は思う。

ともかく、風呂の恨みはすさまじかった。アッ

サリアの街を回る間も、一日中、少年は嫌みを言われた。もう一つ悪いことに、今日も、魔法の剣に関して、ほとんど収穫も無かった。

ギョーム以外の、三人の魔法を知る者を尋ねた。それぞれ、鍛冶師、商人、探鉱者の組合代表である。しかし、皆、魔法の剣については、何も知らなかった。

ただ、商人組合と鍛冶師組合は、それとなく魔法の剣について探りをいれる、と約束してくれた。これが成果と言え、言えなくもない。

「今日もお疲れ様」

（おつかれ）

アガサが寝台に倒れ込んで、そのまま沈み込む。バタバタと足を動かして靴を脱いだ。我が家か、というくらい騎士団の来賓宿舎に馴染んでいた。

少年も、革張り椅子に身体を預ける。水差しに用意された、花の香りのする水を、腕に注ぐ。

（このまま ここに 住む？）

寝台からはみ出した、アガサの腕がそんな事を主張する。

「それも、良いかもねえ……」

その時だ。部屋の扉が叩かれる。こういう時の対応は、もちろん少年の役目だ。

「はい。どうぞ」

少年が扉を開ける。すると、ギョームが控えていた。恭しく、胸に手を当て一礼する。

「ギョームさんじゃないですか。こんにちは。あ、そろそろ、こんばんは、ですかね」

「お休みの所。失礼いたします」

「いえいえ。どうかしました？」

「こちらの不手際で、アガサ様に迷惑をおかけしましたかと……」

少年は一瞬、振り向く。アガサは、寝台の上で、トラの敷物のように寝転がっている。アガサの敷物だ。

「……そんな事は、無いですよ」

「いえ。お風呂を用意の忘れておりました」

お手紙を頂きました、とギョームが言う。彼女ならば、やりかねない。

少年が、ちらりとアガサを見る。寝転がったままだが、僅かに筋肉が強張っているのを、少年は見逃さなかった。聞き耳を立てている。

「僭越ながら、アガサ様のお風呂を用意させて頂きました」

「……いや、本当、すみません。ご迷惑おかけして」

「こちらこそ、申し訳ございません。それで、お詫びと言つては、大したことではないのですが——」

用向きを伝えると、やがて、ギョームは帰っていった。

少年は、ギョームの提案を吟味する。思つたより早かったな、と心の中で呟く。

「ねえ、アガサ。起きてる？」

うつ伏せのアガサに、少年が尋ねる。アガサが、頷く、というよりは、寝台により深く顔を埋める。

「明日なんだけど、ギョームさんが、お風呂を用意してくれるって」

アガサが飛び起きる。

（本当？）

アガサが、口までパクパクさせているのを、少年は見た。

「本当だよ」

アガサの顔が、ぱあつと輝く。

（ギョーム　さん　良い人　）

「本当にね……」

（守り手　交代？　）

「いや、それは流石に勘弁……。それと、ギョームさんが、訓練を見に来ないか、つて。余興の代わりだとか」

（訓練　面白い　？　）

なかなか難しい質問だ。確かに、暴力を見世物として楽しむ人は、居る。しかし、アガサは、そういった見世物を好まない。もちろん、毛嫌いしているという程でもないのだが。

ただ、アガサに訓練を見に行ってもらう方が、少年にとっては都合が良い。

「楽しいと思うよ。昔だけども、走ったり、槍を投げたり、木に登ったりの競争を見物したじゃない？」

アガサが頷く。

（大きい　お祭り　だった　）

「あんな感じだと思うよ。二つに分かれて、模擬戦とかしてくれるらしい」

（行く　）

アガサは行く気になってくれたらしい。

「そうか。良かったよ」

「何をしているの？」とでも言いたそうな眼付きで、アガサが少年を睨む。少年は、アガサの両手を握っていた。少年は、アガサの視線に気づいていたが、その手を放さなかった。

彼女は、声を出せないから、手の形で意思を伝える。アガサからしてみれば、それは口を塞がれているに等しい。

「いや、何となく……。ごめん」

少年が、握った手を放す。

（いきなりは　止めて　？　）

「うん」

（何か　あった　？　）

「いや。無いよ」

「たぶん、有るのはこれからだよ」と、少年は言わない。

「それより、ご飯行こうよ。たまには外で食べる？」

（それも　良い　かも　）

二人は連れ立って、市場へと出かけた。日が沈

んでも、街の喧騒は消えない。

3

灼熱の太陽のせいで気づきにくいだが、砂漠の空気は、おそろしく澄んでいる。空気に、まるで水分が無いからだ。

夜明け間際は、その透明さが際立つ。そして、昼になれば、日光が世界を白く染め上げる。だが、それも、いつまでもは続かない。やがて夕暮れが訪れ、また長い夜が来る。

砂漠の片隅に、天幕が張られていた。その中、背もたれと、ひじ掛けのついた豪華な椅子にアガサが座っていた。

ここまで運ぶの、大変だっただろうな、と少年は思ってしまう。

（座る？）

アガサが尋ねる。少年は首を振る。

「ボクはここでもいいよ」

少年は、アガサの椅子の横に立っていた。

（お菓子 取って）

「はいよ」

天幕に置かれた卓には、砂糖菓子が積まれていた。至れり尽くせりである。

「この生活に慣れちゃうと、また旅に出たとき大変だよ」

（へいき どうせ しばらくは 出れない 魔法の剣 見つかから ない から）

「うーん。どうだろうね……」

その時、ギョームが、近づいてきた。

「アガサ様。守り手殿。準備が整いました」

天幕から少し離れて、屈強な騎士たちが整列していた。騎士たちが、正方形の隊列を成している。まるで、四方に縄でも張ってあるかの様に、整っている。

「それじゃあ、お願いします」

「承知しました」

ギョームが天幕を出る。

「行進始めッ！」

砂漠の風にも負けない、良く通る声で叫ぶ。騎士たちが行進を始めた。動いても、彼らの隊列はまるで乱れない。綺麗な正方形のままだ。

「右ッ！」

隊列が、隊形はそのままに、一瞬のうちに、直角に右へと曲がる。アガサも、騎士団の糸乱れぬ動きに見入っていた。

ギョームが、次々と号令を飛ばす。その度、隊列が形を変える。ひし形、長方形、円形、はしご型、そして最後は、正方形に戻った。

「演武！」

皆が一斉に、型を演じ始める。全ての騎士の斬撃が、足さばきが、全て、同時なのだ。

振り回しているのは、背丈ほどある、極太の大剣だ。木剣ではなく、真剣である。一つでも動きを誤れば、隣の間僚の首を飛ばしかねない。

それにしても、綺麗だった。どれほどの修練を積んだのか、少年は想像することができた。彼もまた、武術の使い手なのだ。

アガサなどは、椅子から身を乗り出して、眺めている。

やがて、演武が終わる。

「納刀！」

カチン、という、刃が鞘に収まる音が、一つし

か聞こえなかった。

「これより、模擬戦を始める！ 皆、位置につけ！」
騎士たちが二つに分かれ、移動し始めた。そして、あつという間に、アガサたちを囲った。天幕の周り、円形の人垣ができていた。

（なに？）

「……何だろうね」

すると、ギョームが前に進み出て言った。

「アガサ様。あなたの御命を、貰い受けたい！」

アガサが、口をパクパクさせている。きよろきよろと、辺りを見回す。周りを取り囲む騎士以外には、砂しかない。アガサは、結局、少年を見た。

「ギョームさん。あなた方が魔法を隠していたのですね？」

「そうです」

「何故？」

「愚かな質問だ。アッサリアのために決まっている」

「……なるほど」

この屈強な騎士たち一人、一人がその手に、全てを切り裂く魔法の剣を持ったら。背筋が凍る。

「しかし、ギョームさん。あなた方も愚かですよ。こっちには、歌姫がいる。魔法が、怖くないのですか？」

「アガサ様の声を、私はお聞きしたことが有りません」

「……あー、なるほど……」

「やはり、貴方は魔法を使えないようですね」

（ごめん バレた ごめん）

アガサは人前で、手話を使い始める。もうバレたので、今更、隠しても仕方ない。

「……大丈夫だよ」

少年がアガサの背中をさする。

アガサが魔法を使えない事を漏らしたのは、少年なのだから。

アッサリア街を回り、全ての長に会った。少年はその際、それとなくアガサが魔法を使えないことを告げた。そうすれば、魔法を隠している犯人の方から、襲ってきってくれると思ったのだ。

騎士団が隠匿しているだろうと、予想はしていた。アッサリアで魔法の剣について聞き込みを始めてすぐ、接触してきたのが、アッサリア騎士団

だったからだ。宿舎を提供したのも、見張りの意味も有ったのだろう。

少年の予想は当たったわけだ、やはり、探偵のような真似は、少年には合っていない。荒事で解決するなら、その方が良い。後は、この剣の群れを乗り超えるだけだ。

天幕の外へと、二人で歩み出る。天幕の下に居ると、柱を折られたときに、危ない。

「ここから、動かないでね」
アガサが頷く。

見覚えの有る三人が人垣の中から、進み出てきた。つい先日、少年と手合わせした若い騎士たちである。

彼らは少年を、守り手さん、と呼んで慕っていた。少年も彼等に、いくつか技を手ほどきした。もしかしたら、友と呼べるような関係なのかも知れない。少年は、そう思っていた。

「貴方の事は尊敬しています。できれば、私たちの手で、決着をつけたい」
騎士のうちの一人が言う。

「君たちの手で決着をつけたら、何なの？」

死んだら結局は一緒じゃないか、と少年は思う。

「……まあ、何だって良いんだけどさ」

三人の騎士が、大剣を抜く。対して少年は無手である。僅かに腰を落とし、重心を低くする。

騎士たちが、走って距離を詰めてくる。そのま
ま、三人同時に、斬撃を放った。軌道が絶妙だ。
一切、交錯しない。しかし、全ての切っ先が、少
年の急所、胸、首、臍へと伸びてくる。決まった、
と騎士たちは確信していた。しかし、その手ごた
えの無さに驚く。まるで、煙でも斬ったかのよう
な、感触だ。

少年は騎士たちの、予想もしない方向に跳んだ
のだ。つまり、前である。迫りくる斬撃に向かっ
て、頭から飛び込んだのだ。騎士たちがまだ、斬
撃を放ち切る前に、その隙間を、掻い潜った。

騎士たちからは、少年は消えて見えた。斬撃に
飛び込んだ勢いそのままに、騎士たちの背後へと
走り抜けたのだ。ここで、少年は腰に括った短剣
を抜き、逆手に構える。

騎士たちが、少年の姿を探して、振り向く。そ
の時には、首に、深い切れ込みが入っていた。三

人が同時に、砂に倒れる。どくどくと溢れる赤い
血を、乾いた砂は瞬く間に吸い取ってしまう。

取り囲む騎士たちの、空気が変わった。かつて
訓練の時に少年が見せた実力は、彼の本領でない
と、気づいたのである。

「うろたえるな！ 数はこちらが上だ！」

すかさず叫んだのは、ギョームだった。浮足立
ちかけた騎士たちは、落ち着きを取り戻す。少年
は内心、舌打ちした。ギョームが居なければ、今
のうちに、囲みを突破できたかもしれない。

「剣牢の構えー！」
けんろう

ギョームが号令を飛ばす。すると、囲みの中か
ら、二十人ほどの騎士が前へと出てくる。少年は
アガサの傍で、様子を伺っていた。陣形を汲まれ
る前に倒すのが基本だが、アガサの傍を離れるわ
けにもいかない。

騎士が、アガサと少年を、丸く囲む。皆、大剣
を身体の真正面で、切っ先が天頂を差すように構
えている。少年がどこを向いても、大剣が規則正
しく並んでいる。まさに剣の牢だ。

騎士たちが作る円の中心に、アガサと少年は居た。騎士たちは一定の速さで横に移動する。円を回すことで、的を絞らせにくくしていた。そのまま騎士たちは、徐々にその円を狭める。

一人の騎士が倒れた。少年が、手首の筋肉だけで、短剣を投じたのだ。それが、騎士の喉元を射抜いた。一切の予備動作の無い投擲に、騎士たちは、誰一人として反応できなかった。

しかし騎士たちは、仲間が突然、血をまき散らして倒れたのに、一糸乱れない。剣牢を組み続ける。

「……嫌に、なるよ」

少年は呟く。再び、投剣。見事、一人の騎士の喉元を射抜いた。しかし、騎士たちは乱れない。短剣の数には限りがある。何本も投げるわけにはいかない。

騎士たちは、死を恐れていなかった。

それって、そんなに簡単に克服できるものなんだっけかな、と少年は思う。

少年が、短剣を抜く。そして、投擲の構えを取る。もちろん、投げはしない。ただ、圧力をかけ

るだけだ。この短剣を投げれば、お前らのうち、誰か一人は死ぬんだぞ、という圧力である。敢えて、重心をずらしたり、視線をさまよわせて、動揺を誘う。

しかし、騎士たちは、一切、乱れない。一步、また一步と、距離を詰めてくる。

じわり、じわりと距離を詰めてくるのが、いやらしい。走って迫るなら、多少の、隙間は出来たかもしれない。少年は必死に、隙を探す。

少年が、投擲の姿勢を解く。両手に、短剣を構える。

片腕で、アガサを抱き寄せる。アガサが、少年の胸板に唇を当てる。その動きで分かった。

（ごめん）

「……大丈夫」

距離は着実に詰まる。そして、剣牢が完成した。

騎士たちは、互いの肩がぶつかるか、ぶつからないかという間隔で、剣を構えて居る。囲みの半径が、大剣の間合いよりも、僅かに狭くなった。

合図は無かった。しかし、一斉に、騎士たちは一撃を放つ。ある者は振り下ろし、ある者は突き

込む。全ての斬撃が、美妙に異なる軌道を描いて、少年たちに襲い掛かる。

二十近い大剣が、鳥の巣のように少年を取り囲んだ。血が、大剣の刃を伝う。その様子は、さながら薔薇のようであった。

しかし、少年は傷を負いながらも、生きていた。彼の腕の中の、アガサに至っては無傷である。

躲せる斬撃は、最小の動きで躲し、弾けるものは短剣で弾いた。残りは、身体に括ってあった短剣や、鉾付きの靴で受けた。それでも、よけきれないものは、何とか急所だけは外した。

少年の体に、刃が何本か突き刺さっていた。冷たい。鋼は冷たいのだ。体の中に、氷柱を埋め込まれたような感覚だ。容赦なく、熱を、命を奪い去っていく。

しかし、その冷たさもすぐに消える。燃えるような激痛が襲ってくる。灼熱の砂漠において、その熱さをなお、はつきりと感じる。

ただ、それでも少年は生きていた。

騎士たちは、目を疑った。少年が、微かだが動いている。急いで、止めの一撃を見舞わなければ。

騎士たちが、大剣を握る手に力を籠める。

その時、少年は動いた。身体から流れ落ちる血を、跳ね飛ばしたのだ。それが何人かの騎士たちの、目に入る。視界を奪われた騎士が、慌てて剣を動かす。すると、他の騎士の動きを邪魔することになる。

緻密な連携は脅威だ。しかし、一か所が崩れると、全体に影響が及ぶ。

騎士たちの動揺は、手を一回打ち合わせるほどの、短い時間だった。その間に少年は、二人の首を跳ね飛ばした。

更に達溢れる。流れ落ちる深紅の液体を、少年は短剣の腹で受けて、まき散らす。騎士たちの視界を奪う。

密集してはまずい。ようやく騎士たちが距離をとった時には、剣牢を組んでいた、半数が倒れていた。生き残った彼らも。一旦、後ろに下がる。

対する少年も無傷ではない。

切り傷が数か所。そのうち一本、左腕の傷は、だいぶ深い。短剣を吊っていた剣帯で、傷口を縛

る。あばら骨も、二本、折れていた。身体に括りつけた短剣で受けた時、衝撃は殺しきれなかったのだ。

ざっと、辺りを見る。騎士たちは、未だ、三人近く残っている。

もう二回。下手したら一回。同じことをされたら、たぶん死ぬだろうな。少年はそんな事を思う。

(ボク、ダメだよなあ……)

アガサは少年の服を掴んだままで、自分たちを遠巻きに囲む騎士たちを見る。

深い藍色の空に、星が浮かぶ。太陽が、砂漠の地平線に触れようとしていた。騎士たちの影が、長く伸びる。それが怪物みたいだった。ぽつんと二つ、寄り添っている影は、アガサと少年のものだ。

「……あー、その、アガサ。頼みが有るんだ」

(なに？)

「……歌を聞かせて」

(声 無いよ)

「大丈夫。音なんて出なくなたって良いんだ」

アガサが頷く。そして、立ち上がった。腕を広

げ、大きく息を吸い、目を閉じる。それから、ゆっくりと歌いだした。

「……アガサ。良い歌だね」

アガサの口からは、当然、ヒューヒューと、掠れた音だけが漏れる。魔法を操るはずの歌声は、一切、聴こえない。

しかし、その時、風が吹いた。魔法ではない。天然の風だ。砂が舞い上がる。

灼熱した砂漠の気は、日が陰ると急激に冷やされ、上空の冷たい空気が一気に流れ込む。その時、強烈な風が起るのだ。少年は、訓練の時に体験済みだった。

騎士たちは戸惑う。その渦巻く風の中に、もしや歌姫の声が混じっているんじゃないか。無いとは言いい切れない。歌姫が、魔法を使おうとしているかもしれない。騎士たちは囲みを解かないが、及び腰だ。

「うろたえるな！ 奴に魔法は無い！」

ギョームが叫ぶが、今度は効果が薄かった。少年が、一人で十人以上を殺していたからだ。

渦巻く風に吹き上げられた砂が、幾重にも引か

れた幕のようになっていた。その陰に隠れながら、少年は駆けた。手当たり次第、視界に入った騎士を斬りまくったのだ。

「うおおおおおおお！」

初老の騎士が、少年に気づいたらしい。大胆にも打ち掛かって来た。少年は、思わず舌なめずりする。

短剣を二本、投じた。それが、吸い込まれるように、突撃する騎士の喉と目を射抜いた。突撃の勢いそのままに、騎士は転がりながら砂の上に倒れた。それきり起き上がらない。

この状況を、アッサリア騎士たちはどう思っただろう。薄暮の中、砂に紛れて疾走する少年を、騎士は認識できていなかった。だから彼らは、魔法だと思った。超常の力によって、騎士たちが倒れていくのだと。騎士たちが、思わず後ずさる。

円陣の中心で歌い続け少女。その姿は、確かに、仕掛けが割れている少年からしてみても、神々しいものを感じた。

後、一押しだ。

少年は駆けた。姿勢を低く、できるだけ低くし

て。地を這うように駆け抜けた。アガサの傍を離れるのは怖かった。しかし、この機を逃せば確実に死ぬ。

少年は駆ける。一人でも多く、殺すために。

地面から、少年が飛び出して来た。ある騎士は、そう感じた。すれ違いざま、その騎士の顎下を短剣で撫でていく。少年はそのまま駆け続けた。

太陽が、水平線にかかる。この暗さも、少年に味方した。もはや、騎士の戦列は崩れていた。騎士たちは少年を認識できていなかった。ただ、魔法だ、と思う。得体のしれない魔法で次々と仲間が斃れていく、と思う。

中には、アガサに斬りかかる者もいた。しかし、そういった輩は、アガサに集中しているので、逆に与し易かった。少年は背後から、簡単に短剣を、喉元に突き刺せた。間に合わないときは、短剣を投じた。

一人の騎士が逃げ出した。この時、完全に勝敗が決まった。

一人逃げだせば、後は早い。続いてもう一人、二人、逃げ出す奴が現れた。水が手の平から零れ

落ちるように、敗走が始まる。

それでも、その場に踏み止まって、戦おうとする者もいた。少年は、そういった者を優先して狙った。

少年は、駆けまわりながら思う。魔法。という超常の存在を前にして、踏み止まろうとする者が、こんなにもいるのか。少年にとつてはそれが驚きだった。

踏み止まった騎士は、声を張り上げて、戦列を維持するように訴える。そして、剣を構え、周囲を見回す。懸命に、状況を把握しようとしている。

ただ、勇敢な彼等も、頭数が揃わなければ、少年に敵わない。少年は、彼らの背後から忍び寄り、首筋に、刃こぼれした短剣をねじ込む。後半は、もはや戦いというより、作業のようだった。

もういいか、と少年が速度を緩めた時だった。少年は、背筋に、チリチリと妙な感覚を感じた。少年の経験上、この感覚はよく当たった。

少年が振り向く。砂煙の中、アガサに向かって猛然と突貫する影が有った。少年は目を細める。あの巨体。ギョームだ。もう、間に合わない。少

年の足でも、無理だ。

少年は、手に持った短剣を投げた。これが、最後の一本だった。そして、その一本を外した。ギョームが咄嗟に、身体を捻ったのだ。

(大した勘だよ)

少年は舌を巻く。

短剣は、ギョームの首を僅かに逸れ、肩当てに弾かれた。しかし、ギョームの突貫する速度が僅かに緩む。

間一髪で間に合う。アガサに、抱き着いて、押し倒す。幸い、下は柔らかい砂だ。少年とアガサは、もつれるようにして地面を転がる。その上を、巨大な鉄塊、大剣が通り過ぎて行った。

「あなたの負けだ。剣を置いてください」

起き上がりざま、少年は宣告する。それでも、ギョームは大剣を振るった。少年はアガサを抱えたまま、飛んで躲す。

暴風のような連撃を、少年は何とか掻い潜る。

(鋭い……)

今までやり合ったアッサリアの騎士の中で、一番、強い。おまけに少年は、素手だ。アガサを抱

えたままでは、そう長くは持たない。

ついに、ギョームの大剣が、アガサに掠った。彼女の羽織った風よけに、切れ込みが入る。恐怖に、驚きに、アガサの顔が歪む。

「……お前、殺すぞ」

少年が呟く。それでも、ギョームは剣を振るい続ける。

少年の足が、砂に取られた。

横薙ぎの一撃。鉄の刃が、アガサの肩に触れる。

あと、瞬き一つする間に、大剣はアガサにめり込む。すかさず、少年が自分の腕を、アガサと刃の間に挟みこんだ。切っ先が、少年の右腕に食い込む。

筋肉の繊維の束が、ブチブチと絶たれていく。

少年はその感覚に集中した。時間の流れがゆっくり感じられた。少しずつ、少しずつ、大剣が食い込む。

(……………ここっ！)

一瞬、ほんの僅かに、大剣が遅くなる。刃が少年の骨に達したのだ。少年は、この瞬間を逃さなかった。自分の骨を使って、大剣の軌道を逸らし

た。勢い余って、ギョームの身体が、泳ぐ。

(だいぶ、血をながしたなあ……)

少年は、どこか他人事のように、身体の様子を確認した。彼にしてみれば、自分の身体も、短剣も、あまり変わらない。抱えた、アガサの身体が熱い。彼女の息遣い、筋肉の震えが、伝わってくる。

「アガサ、ごめん」

少年がアガサを、後ろに突き飛ばした。彼女が、砂原に転がる。少年は、アガサを背後に背負う形で、ギョームと対峙する。これでアガサの危険は減ったし、少年もある程度、自由に動ける。

少年の身体はひどく冷たかった。かなり血を流した。死がだいぶ近づいている。

だから何、って話だけども。少年は思う。

ギョームは剣先を少年に向けて、地面に水平に剣を構え、そのまま突貫した。鎧を着込んだ大男が、丸太のような剣を突き出して、突進してくる。

少年は無手だ。しかし、少年の真後ろには、アガサが居た。彼が躲せば、アガサが轢き殺される。それが、ギョームの狙いだった。

「うおおおおお！」

ギョームが怒声を上げる。大質量が迫ってくる。切っ先は真つすぐに、少年の喉元に伸びる。

もちろん少年に、避けるつもりは無い。少年は、片足を強く踏み込み、膝近くまで、砂に埋めた。腰を低くし、重心を落とす。下半身が、石像の如く固定された。そのまま、腰に添えられた、左拳を、真上に振り抜いた。

少年の拳が、大剣の腹を捉えた。鈍く硬い音が響く。まるで、巨岩にでもぶつかったかのような音だった。大剣が、宙へ跳ね上げられ、ギョームの突進が止まる。

速度任せに、拳をぶつけるような、ただの打撃ではない。重心の移動、腰の捻り、関節のバネ、筋肉のしなり。全ての運動の勢いを、余すことなく、拳に集約させる。

この特殊な打撃は、素振りするだけでも困難だ。それを、動いているものに当てようと思えば、少年でさえも不可能に近い。しかし、予め軌道が分かっているなら話は別だ。

少年は、アガサを囿にしたのだ。アガサを背負うように立てば、ギョームは突っ込んでくると読

んでいた。

少年は、がら空きになったギョームの懷に飛び込んだ。拳は使えないので、鳩尾へ、膝蹴りを見舞う。

「くっ……」

ギョームが地面に膝をついた。

続いて、腕に廻し蹴り。手の力が抜け、大剣を取り落とす。少年は、すかさずギョームの背後へと回る。体当たりで、地面に押し倒す。そのまま、ギョームの右腕を極めて、のしかかる。これで、無理に立とうとすれば、右腕は折れる。

少年は、しばらくそのままだった。そうして、流石に上がっていた息を、整えた。それから少年が訊く。

「ボクたちを殺そうとした理由は、見当がついています。魔法を隠したかったんですね？」

「……………守り手殿の実力……見誤りましたな」

太陽が一瞬、眩しく光る。それが最後の輝きだった。地平線に完全に沈む。西の空が、静かに赤く、染まっていた。風はとうの昔に止んでいたようだ。

「……殺さないのか？」

「もちろん、殺しますよ」

少年は淡々と言う。

「だけど、その前に質問に答えてください。何故、魔法を隠したのですか？」

「……ご存知のはずだ。魔法がいかに強力であるのか」

「それは、もちろん。ただ、ボクたちと、歌姫と守り手と戦ってまでも、魔法を欲しかったのですか？」

「アッサリアは弱い」

「見た感じ、そんな事は無いと思いますけどね。」

豊かで、物に溢れている」

「金は有る。しかし、武力が無い」

「ああ、確かに」

軍隊を維持するには、食料も、水も、場所も要る。その上、平時は完全なただ飯喰らいだ。この不毛の地に、大規模な軍隊を、常駐させる余裕は無い。

「アッサリアは、こちらの国の、便利な財布だ」
アッサリアの外交方針は、要するに八方美人だ。

武力がないから、どの国とも事を構えたくはない。そのため、どの国にも良い顔をする。

それ自体は良い。しかし問題は、周辺で戦争が起こった時だ。

そうなれば、各国は、金の有るアッサリアから戦費を調達しようとするはずだ。ある二国が戦を起こしたとして、アッサリアにしてみれば、そのどちらも友好国なのだ。どちらかを援助する訳にはいかなない。援助すれば、もう片方の国を裏切ったことになる。

ならば両方の国を援助するか、もしくはどちらの援助も断るか。その場合、両方の国を敵に回すかもしれない。

戦争を始める国が二国だけとは限らない。これが、複数の国同士の間で戦が起きたら、事態はますますややこしいことになる。

ただ、アッサリアが武力を持てば、金を要求されても拒否することができる。そもそも、どの国にも良い顔をする必要が無くなる。

「……だとしても、魔法は、人間の意志で使って良いものではないんですよ」

「そんな事、誰が決めた」

「お気持ちは、分かりますけど」

「貴様には何も分かん」

「これでも、いろんな国を見て回っているんで」

「貴様には分からん。……帰る場所を持たぬ、名無し風情が！」

その時、ギョームが少年を押しつけて、立ち上がった。

少年がギョツとする。彼は確かに、ギョームの右腕を極めていた。ギョームが立てるはずがない。

「お前」

少年が極めた腕は、肩までしかなかった。その腕は、肩ごと切断されていたのだ。鎖を編んで作った、鎧までも斬られている。

ギョームは左手に、細い剣を持っていた。彼は自ら、右腕を断つたのだ。身体と別れた右腕は、未だに暖かい。滑らかな切断面から、血が線になって垂れている。

「アッサリアのために！」

ギョームの突き込み。

切り落とした腕と、流した血の分だけ、ギョー

ムの身体は軽くなっていた。その突きは、今までで一番、速く、鋭い。切っ先が、アガサへと伸びる。

少年が、アガサとギョームの間に、割って入る。ギョームの突き出した腕を絡めとり、突きを勢いをそのままに、背負って投げる。

「アガサ！ 平気？」

アガサが頷く。しぶとい相手だった。少年は額の汗を拭う。

ふと、少年は背後に殺気を感じた。

ギョームがよろよろと立ち上がろうとしていたのだ。しかし、立つことだけしか、できなかった。血を流し過ぎたのだ。右肩が、鎖骨の辺りから無くなっている。

荒々しく息をしながら、それでも少年を睨みつけている。

それも、長くは持たなかった。やがて、膝をつき、そして、倒れた。まだ生きているのか。しかし、もう助からないだろう。

だが、少年はしばらく構えを解けなかった。ギョームの死に様に感じたのは、恐怖だった。

アガサが、少年の顔をのぞき込んだ。

「……ご、ごめん。もう、終わったから」

少年が、ギョームの傍にしゃがみ込む。確かに死んでいた。それを確認すると、少年もその場に寝転がりたくなかった、がそうもいかない。

少年は、ギョームが持つ剣を、拾い上げた。それはアッサリア騎士たちが振り回していた大剣と比べると、遥かに華奢だ。針金のような。

ただ、刃の輝きは異常だ。

アガサが、少年の袖を引く。

「あ、ごめん」

少年は、剣に見惚れていた。余りにも美しかった。視線をその切っ先から外すことが、苦痛でさえあった。

「やっぱりこれ、魔法だよな？」

アガサが頷く。だいたい、寝たままの姿勢で鎧ごと腕を切断するなんて、人間業じゃない。

「一応、確かめておこうかな……」

少年は、亡骸になっていたギョームの、肩当てを剥がす。板金を叩いて整形してある。なかなかの逸品だ。アッサリア騎士団の団章が刻まれている。

る。

少年はそれに、切っ先を突き立てる。すると、刃は、抵抗もなく刺さった。

「うわあ……」

この切れ味。背筋がぞくぞくする。

無手であつたことが、却って幸いしたのかもしれない。短剣を持っていたら、腕を絡めて投げるなんて、危なっかしい受け方はしなかったはずだ。より確実に、短剣で弾こうとして、魔法の剣に、短剣ごと貫かれていただろう。

（やっぱり 魔法の 剣）

「相変わらず、物騒な品だよ」

（すごい 切れ味）

「……まあ、それも有るけどさ」

アガサが不思議そうな顔をする。

少年は、この剣を持った時、戦う自分を想像した。このボクが、全てを切り裂く剣を持ったら。

そんな想像をしてしまった。魔法の力に、呑まかけたのだ。

魔法を勝手に使つてはいけないことは、少年が一番、知っていた。

（行こう 寒い）

アガサが言った。既に砂漠は、完全に夜の中に沈んでいた。しかし、砂漠の夜は、意外と明るい。なんせ雲一つ無いので、空は全面、星が張り付いている。

「そうだね」

アガサが、少年に手を差し出す。少年はその手を取った。

4

帰り道も、少年たちは騎士に襲われた。残党が、待ち伏せしていたのだ。不意を突かれたが、少年は難なく撃退した。精緻に組まれた陣形こそが、アッサリア騎士の強みだ。個々の力は、少年に遥かに劣る。苦し紛れの突撃など、手負いでも怖くない。

「驚いたよ。あんなに、こつぴどくやられたのに、また襲ってくるなんて」

アガサが頷く。

「鬼気迫るものが有るっているか、なんていうか

……」

ギョームの死に様が、思い浮かぶ。アッサリアを守るという意思が、騎士団の強さなのか。少年には無いものだった。

実際、少年は、ここまで危うい展開になるとは思っていなかった。訓練に参加して、そう判断した。ところが、いざ斬り合いになると、彼らは実力以上の力を発揮した。アガサに助けられなければ、死んでいた。

完全に読み違えた。アガサを危険に曝したことが、情けなかった。完全に少年の失敗だった。それも、だいぶ間抜けな類の失敗だ。

アガサが魔法を使えない事をバラすべきではなかった。もつと他にやりようが有った。少年は、その事ばかり考えていた。

魔法が使えないことがバレたのは自分のせいだ、とアガサに言うべきか、少年は迷った。自分の中だけで抱えているのが、辛かったからだ。しかし、思い留まった。

打ち明けて、アガサの信頼を無くす事が怖かったからだ。

「アガサ。ごめんな。危ない目に遭わせて」

それだけ言う。アガサは、首を横に振った。

（大丈夫）

「……そう」

少年の、ごめんの意味を、アガサは正しく理解していない。アガサは、少年が自ら騎士団に襲われるように仕組んだことを知らないからだ。それでも、少年の心は、幾分、軽くなってしまった。

（それより 今日ほ どこで 寝る ？ ）

「あ、そうか。騎士団の宿舎は使えないのか……」

少年たちは、結局、その辺の安宿に泊まった。

流石に、騎士団の駐屯所には泊まらない。寝首を搔かれたら、笑えない。

（ボロい 汚い）

「……我慢してよ」

貴族のような暮らしに慣れてしまったアガサは、普通の宿では満足できない様だった。

「明日か、明後日には出発するんだよ？ 早く慣れないと、この先、大変だよ」

アガサが、ため息をつく。ひゅー、と掠れた音がした。

翌日、アッサリアの一角、泉の傍の料理屋で、

長の会合が開かれていた。しかし、いつまで経ってもギョームがやってこない。商人の長、探鉱者の長、鍛冶師の長は首を傾げる。傾げながらも、卓上の料理はみるみる減っていく。

そんな時、少年とアガサが現れた。

（美味しそう）

「……食べちゃダメだよ。ところで、皆さん、お土産です」

少年が、卓上に、腕輪を置く。素材はただの鉄だが、凝った作りをしている。輪の内側に、剣の意匠が刻まれているのだ。それを見て、鍛冶師の長が言った。

「……それは、俺が作ったものだ。どこでそれを？」

「ギョームさんを殺して、奪いました」

それから、早かった。どうしようもないと悟った長たちは、潔く魔法の剣の隠し場所を白状した。

それは、砂漠をしばらく歩いた所に有った。かつての坑道跡である。

「……魔法は、この先に有ります」

「分かりました。案内は任せます」

少年は、案内の探鉱者の長の、手首を縛った。変な気を起こさないようにするためだ。いざとなったら、人質にしても良い。

少年たちは、下へ、下へ、と坑道を降りていく。既に、帰る道は分からなくなっていた。そのくらい、坑道は入り組んでいた。

罠に嵌めるなら、もってこいだよな。少年は思う。一方で、アガサは楽しそうだ。自ら角灯を持っている。

「探検、気分なのね……」

アガサが頷く。ふと、探鉱者の長が、立ち止まった。

「こちらです」

目の前に、木製の扉が有った。比較的、新しいのだ。

「開けて、先に入ってください」

「……はい」

長は、手首を縛られたまま、苦労しながら扉を開けた。

その先に有ったのは、鍛冶場だった。設えを見

れば、武器を造るための工房だと分かる。なるほど。こんな所に有ったら、見つからないはずだ。

「アガサ。どれが魔法？」

アガサは首を振る。

（全て 違う）

少年が長を睨む。

「……いいや。ここに魔法は有る。嘘じゃない。

おい！ 出てこい！ 早く！」

すると、部屋の奥から、大男が現れた。面長で、ボサボサの長髪を後ろで一つに束ねている。大きなあくびを一つ。

「やー、どうも、シロウさん。そちらの人は？

ていうか、何で縛られてるんです？」

（この人 魔法だ）

アガサが少年の袖を引っ張った。

「人が？」

アガサが頷く。人が魔法を宿すことは、珍しいが、有りえない事でもない。

「あー、バレちゃったんすね」

男が頭を掻く。パラパラとふケが落ちた。

「あなたが、あの剣を打ったんですか？」

「そうスね。で、俺はどうすれば？」

「取り敢えず、すでに打ちあがっている剣を、見せてもらえますか？」

「こつちです」

工房のさらに奥に、もう一部屋、有った。大小様々な剣が、棚に並んでいた。しかし、まともに使えそうな剣は、少年が思っていたより少ない。

「いやー、ちゃんとした、魔法の剣が打てるようになったの、最近なんスよ。それも、小さいやつばかりで。騎士団が使うような、でっかい奴は、まだまだ打てそうにないかな」

男が、今までで一番の出来だ、という剣を取り出した。確か昨日、ギョームが使っていた魔法の剣は、これくらいの大きさだったはずだ。

「これで、全部ですか？」

「そうつす」

「アガサ。どうしようか？」

（剣を 打つ 所が 見たい）

アガサが、ちゃかちゃかと手を動かす。少年は、その旨を男に伝える。

「よーさんす」

男は、さつそく炉に火を入れた。煌々と燃え盛る、炎の赤色は、実は何種類もの赤が混ざっている。

「炎って凄いやね。俺、好きでさ」

男が、炉の中を見つめながら言った。彼の顔を、炎が照らす。

「魔法について、どう思います？」

「別に。……できれば、自分の力で、名刀を打ちたかったかな。……いや。これも俺の実力なのか？ま、どうでもいいけど」

鍛冶が始まった。細長い鋼の板を、男は、炎に曝す。鋼はみるみるうちに、灼熱に染まった。

男が、炉から鋼板を取り出す。それを、鎚で打ち始める。何度も、何度も、ひたすらに鎚を振るう。

少年は、鎚を打つ響きが、妙に澄んでいることに気づいた。まるで、水晶を弾いているような、そんな音だ。しかも、毎回、音階が微妙に異なる。音の伸びも、一音一音、違うのだ。

（そうだ。これは音楽だ）

少年は気づいた。彼は、横に立つアガサを、ち

らりと見る。彼女は目を閉じて、鎚の奏でる音楽に聴き入っていた。

魔法は、音楽によって記録され、それを奏でることで発現する。鎚と鋼がぶつかる度に生まれる音の、音階が、音質が、強弱が、織り成す旋律が、魔法を組み上げるのだ。

アガサは熱心に、その音を聴いている。彼女は歌姫だから、一度聴けば、その音楽を完全に記憶する。ただ、声が出ないので、その旋律を再現することはできない。だから、魔法は使えない。

今回は、鎚を打つ響きが、魔法を奏でていた。

この刀工は、果てしない研鑽の末に、魔法を得たのか。それとも、持って生まれたものか。音を聴くだけでは分からない。

鍛造は、その後も続いた。

そろそろ日が暮れたんじゃないか。空は見えないけど。少年がそんな事を考えはじめたころ、アガサが目を開けた。

（一周　した　もう　大丈夫　）

「そっか」

男は、一心不乱に鎚を振るい続けていた。額を、

玉のような汗が流れ落ちる。

（後は　任せる　）

「……分かった」

アガサだけ先に、工房を出た。少年としては、アガサから目を離したくなかったのだが、仕方ない。

刀工が槌を振るう。その度に、鋼の板から、澄んだ音が溢れ出す。少年は、もう少しこの音を聴いていたいと思った。

「……魔法は、人間の手に余るんですよ。残念だけど」

少年も、なるべく手早く後始末をすると、アガサの後を追った。

5

既に完成していた魔法の剣は、塩水に浸した。

切れ味は神懸かっていたが、所詮は鉄である。当然、錆びるし、錆びたらまるで斬れない。その後は砂漠に捨てた。魔法の剣は、風に削られて、そのうち、大砂漠の一部になる。

アガサと少年は、ルグルー大回廊を、南へと歩いていった。

（疲れた 馬車に 乗りたい）

「そんなお金、無いって」

商人にしてみれば、人間を運ぶより、香草やら、工芸品やらを、運んだ方が金になる。もちろん、アガサが大金持ちなら話は別なのだが。

「おんぶする？」

アガサが首を振った。

（嫌だ バカ）

「そう？ 辛くなったら、いつでも言ってね」

少年の膝の裏を、アガサが蹴つ飛ばした。

それからしばらく、二人は無言だった。四六時中、一緒に居るのだ。喋ることも、尽きてくる。だから二人は、無言でいることがよくある。二人にとって、沈黙は苦にならない。

（名前の こと 気にして いる ？）

ふと、アガサが言った。

「いや、別に。……何で？」

（最近 何か 考えて いた から）

考えていたのは、別の事だった。アガサを危険

に晒してしまったことだ。

「……いや。大丈夫だよ。名前の事は、気にしてない」

（分かった）

少年は名前が無い。魔法で、名前を消されたからだ。頭の中から、名前を引っこ抜かれた。すると、芋づる式に、名前に関連するような記憶も、抜けていった。

例えば、出身地とか、家族とか、恋人とか、年齢とか、前の職業とか、好きな食べものとか、口ずさんでいた歌とか、夢とか。そういうものが全部、抜けていった。

読み書きや、計算、匙の使い方等は、覚えていた。しかし、自分の出自の事となると、何一つ分からぬ。

守り手が、旅の途中で、歌姫を裏切らないようにするためだ。そして、守り手が歌姫を脅して、私欲のために魔法を使う事を防ぐためでもある。

魔法を集めれば、やがて名前は返してくれるらしい。だから守り手は、歌姫を守り続けるしかないのだ。

「……いやね。アッサリア騎士団、強かったなつて。最近、そのことを考えてた」

名無し風情が、とギョームが叫んだ。彼はこうした背景を知っていたのだ。少年が無くしたようなものが、案外、アッサリア騎士団の強さなのかもしれない。

「危ない目に遭わせちゃったね」

アガサが、少年の膝の裏を、蹴つ飛ばす。

（大丈夫 だから）

「ごめん、ごめん」

（次は もっと 水が 有る ところが いい 綺麗な 湖の 近く で 魚を 食べたい）

アガサが饒舌に語る。暑いだろうに、チャカチヤカと手を動かす。話題を逸らそうとしているのだ。そんな様子が、危険を招いた張本人にとつては、たまらない。

「……このまま行くと、ブドウの名産地だね」

少年は、街で聞きかじった知識を口にした。

（ブドウ酒？）

「有ると思うよ。そりゃね」

（早く 行こう）

アガサの歩く速度が速くなる。

少年は、自分が守り手になってから、ブドウ酒を飲んでいなかった事に気づいた。知識として、美味しいものだとは知っている。

「……ブドウ酒ね。ボクの好物なんだろうか」

少年は知らないのだ。彼が何を愛し、何に幸せを感じ、何を求めたのか。そして、何故、声なき歌姫の守り手となったのかを。

いずれ、全てを思い出す時が来るかもしれない。ただ、今、分かっているのは、人よりも腕が立つことと、アガサをちよつと良いな、と思つてのことくらいだった。

（早く 早く）

アガサが振り向いて、少年を急かす。

ルグルー大回廊も、もう半分を過ぎた。道は、真つすぐ南へと続いている。とりあえず、急いだところで、ブドウ園まで、あと七日以上も掛ることを言うべきか。少年は、アガサの後を追つた。

終わりに

手に取っていただき、そしてここまでお読みいただき誠にありがとうございました。もし楽しんでいただけたのならば、それが我々の至上の喜びです。

我々東京農工大学文芸部員一同、再びお目にかかれる日を楽しみにしております。

重ねて、誠にありがとうございました。

意見、感想等ありましたら、気軽に後述のアドレスまでお寄せください。

代表…ASA

漆 第十六号

二〇一七年 五月七日

東京農工大学文芸部

noukoubungei@gmail.com

印刷…ポプルス様